
星空を見上げて

彗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空を見上げて

【Nコード】

N0712C

【作者名】

彗星

【あらすじ】

家族との喧嘩が原因で家を飛び出した楓は、大きな橋の下である少年と出会う。その少年は空から来たというが……。

ブローグ

「あ！流れ星だ！！」

私は橋の下から空を見上げた。今日がいい天気で本当に良かった。寒かったらどうしようかと思っていたのだ。

「流れ星なんて久しぶりだなあ。ホント、きれい・・・。」

と、いくつもいくつも流れる星を見ていると、

ガサガサガサ

「え！？何・・・？」

私は音のする方を見た。草むらから、何か出てくる。

「いてててて・・・ひどいな、もっとゆっくり・・・・・・・・・・。」

「

私と目が合った。

そこにはスラッと背の高い少年が立っていた

。

第1章・星空からやって来た少年

「楓！！！起きなさい！！」

1階から母の声がした。そうだ、今日からまた学校だったんだ・・・
私は急いで制服に着替えると、階段を下りた。

「おはよう。」

私が眠そうに言うと、

「おはよー！」

妹の琴音^{コトネ}はぱっちり目が覚めているようだった。

「早いね、琴音は。」

「楓が遅いんでしょう？もうこんな時間だし・・・。」

「い！？」

時計を見ると、もう7時。

「やばい・・・遅れる！！」

私はパンを押し込み、牛乳をいつき飲みすると、かばんを持って「
いってきます」を言いながら家を出た。

「どんなに遅れても、朝食だけはしっかり食べてくんだね。」

琴音は笑いながら、感心して言った。

外に出ると、雲1つない快晴。また学校が始まると思うと嬉しくて嬉しくて、かけ足で学校に向かった――。

私は楓。中3の女の子。一応受験生なんで、夏休みも勉強を頑張りました。

さあ。今日からまた学校だ。最後の中学校生活、これから何が起きるんだろう。

坂を駆け上がると、そこは学校だ。私は校門をすり抜け、校庭を横切り、校舎へ入った。下駄箱を見ると、まだ一人もない。

「わあ！一番乗りだ！！」

私は何だか嬉しくなって階段を駆け上がった。水道の鏡をのぞきながら、少し髪を整えて、教室に入って行った。いつもなら、少し寂しい誰もいない教室も、今日は新鮮に見える。さっそく窓を開けて、顔を出した。なびくカーテンの音と、鳥たちのさえずりの声以外は、何も聞こえてこない。

「おっはよー！」

元気よく教室に入って来たのは、菜樹^{ナニキ}。私とはずっとクラスが同じで、とてもボーイッシュなのだ。

「あ、おはよ菜樹。早いね！」

「まあな。新学期だしさ。」

「2学期のスタートだね!!」

「だな。あゝあ、夏休み終わっちまったなゝ……。」

「そうだね……。でも!!」

「……。でも?」

と、菜樹は首をかしげて言った。

「学校が始まるよ!また、楽しくなるね!!」

私は両手でガッツポーズをして言った。そのとき、

「おい!転校生がくるんだってよ!!」

廊下を全速力で走り、思いっきりドアにぶつかった隼^{ハヤト}が言った。そう言くと、隼はその場で座り込んでしまった。

「え!?男?女?」

私は隼の腕を引っ張って、起こしながら尋ねた。

「分つかんねえ……。でも、隣のクラスに来るってことは確かだぜ?」

隼はフラフラしながら答えた。

「つか、お前大丈夫？」

菜樹が心配して言った。

「大丈夫だって！だって隼は大きなニュースがある度にこれなんだから・・・。」

私は隼を椅子まで連れて行って、笑いながら言った。

「菜樹は、遅刻魔だから知らないんだ・・・。」

隼はため息をついて言った。

「まあまあ・・・とにかく。」

私がそう言いかけると、菜樹が大声で口をはさんだ。

「見に行ってみるか！！」

しかし、

キンコンカンコン

朝の会が始まるチャイムだ。

「あああ・・・。」

菜樹が言った。

「ちっ……。じゃあ放課後に職員室前集合！」

隼はかばんを片付けながら、大きな声で言った。

放課後、私たち3人は職員室前で集まると、扉のすき間から中をのぞき込んだ。

「おい！押すなよ……。」

隼が下の方から言った。

「あ……。ごめん、ごめん。」

私は体勢を立て直して言った。しょうがない、みんなと一緒にのぞき込んでいるのだから。

「菜樹、何か見える？」

と、私が訪ねると菜樹が目を細めて、

「ん……。そうだなあ。お！知らない人がいるぞ。」

と言うと、隼はワクワクして尋ねた。

「どんな人？どんな人？？」

隼は背が低くてよく見えないようだ。

「なんか・・・女っぽいなあ・・・。」

菜樹は目を凝らしながらそう答えた。

「どんな感じだ？」

隼はもうピョンピョン跳ねている。

「髪が長いな・・・。背中の中ぐらゐであるし。」

菜樹はそう答えると、もっとよく見ようと身を乗り出した。そのとき、

「うわ！！！」

「え！？」

私と菜樹はバランスを崩して、中に倒れこんでしまった。

「おい・・・大丈夫かよ・・・。」

隼だけ後ろで跳ねていたので、倒れなかった。

「なんで、お前だけ倒れていないんだ……。」

菜樹は少し怒ったように言った。

「ははは……はは……。」

「……。」

隼の笑いが止まった。それを見た私と菜樹が、後ろを振り返ると、

「なぐにやってんだ。お前ら。」

そこには嫌にニタニタした、担任の大貫先生オオヌキが立っていた。

大貫先生は怒ってはいないようだった。むしろ、楽しんでいるように見える。

「今日で7人目なんだぞ……お前らで……。」

どうやら、みんな同じようなことを考えているらしい。

「すみません……。菜樹がどうしてもって言うから。」

と、隼が苦笑いして言った。

「おい……。」

と、菜樹は隼をにらみ付けながらぼそつと言った。

「隼も行きたがってたくせに・・・」

私は隼を突きながら言った。それを見ていた先生は、軽いため息をついて

「おゝい、小春。こっちおいで。」

さつきまで、校長先生と話していた女の子がこっちへやって来た。

「水瀬小春^{ミスセコハル}・・・よろしくね。」

「おゝ・・・なんかっこいいな。」

菜樹がぼーっとして言った。

「大人っぽいね!」

私は菜樹の方を見て言った。

「明日から、3Cの仲間だぞ。」

先生は笑顔でそう言つと、

「さあ!用は済んだら?出てった出てった!もう下校時刻だぞ!」

と言って、押し出されてしまった。

私たちは仕方なく帰ることにした。もう夕日が見える時間だ。

「3Cってことは、やっぱり隣のクラスなんだね。」

私は少し残念がって言った。

「3Dにもこないかな。転校生・・・。」

隼は空を見上げて言った。

「あ、じゃあ、ここで！」

踏み切りまで来た所で、菜樹が手を振りながらそう言った。

「あ、じゃあね菜樹！」

私はそう言って、踏み切りを渡って行った。

「また明日な。」

隼は大声で言った。

「遅刻するなよ。」

菜樹は笑って言った。

「遅刻するのは、菜樹でしょ？」

私は踏み切りの反対側から、大声で言った。

「おい、帰るぞ。菜樹！」

隼が菜樹を引っ張っているのが見えた。

「じゃあね！ばいばい。」

私はそう言っ、家へ向かった。

また明日も会える、それが分かっているときの「ばいばい」は、とても幸せな気分にさせてくれる。

そんなことはないだろうか――。

そんな気持ちで家に帰ると、

「ちょっと！帰るのにどれだけかかっているのよー！！忘れたの？今日は琴音の誕生日よ！今日はみんなで夕食なんだから。早く支度しなさい。」

母がご機嫌に言った。

「え！？私の時は何にもなかったのに……。」

「だって、楓の時はお母さんもお父さんも仕事で忙しかったんだも

の。しょうがないでしょ？」

母は着替えながら言った。済んだ事はどうでもいいんだろうか……。妹の琴音は、昔から「可愛い」とか「いい子」とか言われてきた。それはそれで別にいい。

でも、私はいつもそう、ほめられないんだ……。

「琴音ちゃんは可愛いね。」

「琴音ちゃんは大人しくていい子だね。」

どうせ私は、可愛くないし元気がありすぎて大人しくもないですよ！私は小さい頃からそう思ってきた。私なんてどうでもいいのかなあ。

「何ばさつとしてるんだよ。早く行くぞ！」

父は車の鍵をとって言った。

「いい！私行かない！！」

「はあ！？何言ってるんだよ、琴音の誕生日だぞ？」

「私、今日用事があるんだから！！」

つい、嘘をついてしまった。ただ、行きたい気分じゃなかったただけだ。そこに、琴音が来て、

「楓、来ないの？私、楓がいないとつまない……。」

と、下を向いて言った。

「ほら！琴音がそう言うんだから。その用事、琴音の誕生日よりも大事なの？」

「うん・・・。」

もう、どの言葉も嫌だった。

「楓、来てよお・・・。」

琴音が私の腕を引っ張った。

バシッ！！

「え！？」

私は琴音の手を振りほどくと、

「何よ！！みんなして、私がいなくても本当は楽しいんでしょ？私がいらない方がいいんじゃない？」

私は大きな声で言った。

「楓・・・？どうしたの？」

琴音は驚いて父の後ろに隠れた。

「琴音だって、そうやっていい子ぶって！いいよね、可愛い可愛いって、いい子いい子って！何にもしてないのに言われるんだもんね！！！」

私はもう何が何だか分からなくなってきた。何を言ってるか分からなくなる前にどこかへ行こうと思った。

「私、用事あるから！！」

私は走って、家を出て行った。

私は走りながら考えた。ホントは琴音だって、何もしていないわけじゃない。でも、いつも琴音だけがほめられるのが嫌で、勉強も部活も頑張ってきたんだ。それなのに、誰も分かってくれない・・・。

周りを見ずに走ってきたので、隣町との境目にある大きな川まできていた。大きな川には大きな橋がかかっている。私はとりあえず橋の下に入って気持ちを落ち着かせようとした。

「私、なんで頑張ってるんだろう・・・。」

ぼそつと出てきた言葉。今まで考えた事もなかった。単純に、頑張れば親にほめられると思っていたからなのかもしれない。でも、それがなくなるのなら私はこれから何のために頑張っていけばいいん

だろう……。

「せっかく、琴音が好きそうなのを考えたのになあ……。」

私は一ヶ月くらい前から、琴音が好きな犬のぬいぐるみを作っていたのだ。

「自信作なのに……。」

と、苦笑いして言った。そのとき、

「あ!!!」

私の目には、川に映ったたくさんの流れ星が見えた。空を見上げる
ともっとよく見えた。

「流れ星なんて久しぶりだなあ……。ホントきれい……。」

「

と、いくつも流れていく星を見ていたとき、

ガサガサガサ

「え!?!何……?」

私は音のする方を見た。草むらから、何か出てくる。

「いてててて……。ひどいなあ、もっとゆっくり……。」。
「」

私と目が合った。

そこにはスラツと背の高い少年が立っていた。

「君、泣いてるの？」

「。。。。。。」。
「」

私は驚いて口を空けたまま、少年を見ていた。

「ねえ！」

少年は少し近づいて言った。

「へ！？」

私はまた驚いて、思わず一歩下がってしまった。

「そんなに怖がらなくても。。。。。」

少年は困ったように言った。

「え！？だって、今。。。落ちて。。。。。」
「」

「ああ、だって空から来たんだもん。落ちてくるしか……あ、でも、もっと安全な落とし方があったんじゃないかなあ……。」

少年はだんだん独り言になっていった。当たり前のように言ってるけど、空から来たなんでありえない。きっと私をだましているんだろう。

「あの……、冗談なら私……。」

私が最後まで言う前に、

「あー！そういえば、何で泣いてたの？」

と、思い出したように少年が尋ねた。

「何でって……。」

そっか、私泣いてたんだ。いきなりの出来事に、私は家族への怒りも涙もおさまっていた。

「な、何でもないですー!!」

どこの誰だか分からない人にこんな話ができない。しかも、空からやって来たなんて言う人なんか……。

「あ、あの……。さっき空から来たって？」

「ああ。それは……。」

と、少年が話そうとしたとき、突然強い風が吹いた。

ビオオオオオオ

「うわあ、さっきは全然風なんか吹いてなかったのに……。」

私は乱れる髪を押さえながら言った。隣いる少年は、さっきからぶつぶつ独り言を言っている。

「どうしたんですか？さっきから。」

「ん！？いや……何でもないよ。」

少年は笑って答えた。

「君、名前は？」

「え？私ですか？私は天川……。」

「えーーーーーー！！？あ、天川！？」

と、少年はいきなり立ち上がって言った。

「あ、天川楓です……！」

私は大きな声で言った。どうして「天川」でこんなに驚くんだろう……。

「僕、天川って子を探す予定だったんだよ……！」

「え！？でもそれって、私かどうかは・・・だって天川なんて他にもいるでしょ？」

「そうか・・・でも天川なんてそんなにいないんじゃないかなあ。」

少年は少しがっかりして言った。

「ってか、こんな時間に何やってんの？親、心配してるよ？」

少年は顔を上げて言った。

「いいんです・・・うちの親は私の心配なんてしないから・・・。」

私は家で起きたことを思い出して言った。

「それに今日は、友達の家で泊まるつもりだったし。」

私は無理に笑って言った。

「そつか。じゃあ、早く言った方がいいよ。友達も心配してるでしょ？」

少年は私の背中を押しながら言った。

「じゃあ。さよなら。」

私はそう言っで、走って友達の家へ向かった。

「あ．．．。」

少年は犬のぬいぐるみを見つけた。

「あの子のだよなあ．．．。」

そう言っで、ぬいぐるみをよく見て、

「．．．．．天川楓か．．．。」

大きな橋の下で一人、少年がつぶやいた。

「あ！楓……。遅かったじゃん！！」

友達の芽衣^{メイ}が玄関から飛び出して来た。芽衣は私の親友で、いつもテンションが高いから、一緒にいて全然飽きないタイプだ。

「ごめん、服がなかなか見つかんなくてさ。」

私は服の入ったカバンをぶらぶらさせて、へへへと笑った。さすがに、橋の下で泣いていたとは言えない……。

「まあ、いいや。とりあえず、中入りなよ。」

芽衣が私の背中を押して言った。そのとき、同じように私の背中を押してくれた、あの少年を思い出した。

「芽衣、あのさ……。」

「ん？どうしたの？」

「あ、いいや！後で話す。」

私はもう少し頭を整理してから話した方がいいと思った。

芽衣の家のご飯は、ものすごく美味しい。やっぱり真心の違いなんじゃないかと、私は中3の頭で分析した。私は芽衣の家族が大好きだからだ。

「いつもすみません・・・。」

私は申し訳ないなと思いつつも、顔はご飯に目がいつて思いつきり笑っていた。思った通り、やっぱりご飯は美味しかった。

その後お風呂に入り、芽衣の部屋へ向かった。芽衣の部屋はとてもきれいで、私の部屋とは別世界だ。

「どうしたらこんなにきれいな部屋が保てるの？」

私は棚の上の写真たてを手にとって言った。

「ああ、それは・・・・・・・・・・・・・・・・。」

芽衣は私が手に持っている写真たてを見て、懐かしそうに答えた。

「死んじゃったお兄ちゃんがね。ずっと付けてた腕時計があつた。それを1回なくしちゃったことがあつたの。」

「お兄さんの形見？」

「うん。」

「どこにあつたの？」

芽衣は少し大きな声で言った。

「それがさ、散らかってたこの部屋の本の下にあつたわけ！」

「前まで、この部屋散らかってたんだ・・・。」

今まで聞いたことが無かったから、聞いて驚いた。

「私、芽衣がきれい好きなんだと思ってたよ。」

「うそお！？でも私、学校のロッカーはすごいことになってるよ・・・。」

芽衣は二カ二カして言った。芽衣のお兄さんは芽衣が6歳の頃、交通事故で亡くなった。7つ上で妹思いだったから、芽衣の家に行つたとき、私にも優しくしてくれたのをよく覚えている。私がさつき手にしていた写真には、お祭りに行ったときの芽衣とお兄さんが写っていた。

「だから、自分の部屋だけは、いつもきれいに保とうって・・・。」

芽衣はお兄さんの事を思い出しているようだった。

「だから、ここだけきれいなんだね。」

私は笑顔で言った。

「さ！もう寝よ！！電気消すぞ。」

芽衣は急にこつちを向くと明るく言った。私は急いで布団を敷くと、

「オッケー！」

と、言つて布団をかぶつた。窓から月明かりが差し込んでいる。

「結構明るいんだね。夜つて……。」

私はそう言つと、自分が疲れている事に気がついた。

「今日は……いろいろ……あつてさあ……。」

私は今日あつたことを話そうと思った。

「うん……。」

芽衣は優しくうなずいた。

「琴音の……誕生日……で……。」

「うん……。」

「……。」

「……うん!？」

芽衣は私の方を見た。

「あ!楓、寝てるよ。あはは、疲れたんだあ……。」

芽衣は静かに笑つと、私の布団をきれいにかぶせた。

「ちゃんと頼つてね。楓……。」

明るい月明かりの下、芽衣も眠りに付いた――。

その夜、私はおかしな夢を見た。

風が涼しくて、きれいな三日月の夜。私は空を飛んでいて、誰かが手を引いてくれている。下は屋根ばかりで、どこかで見たことのある風景だ。

そうだ、ここは私の家の近くなんだ。

でも、手を引いてくれているのは一体誰なんだろう？そう思って顔を上げたとき、いきなり体がぐらっと揺れ動いた。バランスを崩したらしい。

お、落ちる――！？

第1章・星空からやって来た少年（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

これからどんどん書いていくので、もし良かったら・・・また読んでくださいねw

第2章・不思議な転校生

声が聞こえる――。

「……楓・楓！……かーえーでー!!」

「うわ!!」

私は思わず布団から跳ね起きた。芽衣が耳元で叫んでいた。

「楓、やっと起きた。ずっと声かけてたのに……。」

「ふわぁ。ごめん、今起きるね!!」

私はあくびをしながら布団をたたむと、芽衣と一緒に階段を下りた。もう朝食が机に置いてある。

「ひゃっほう!!卵焼き!!!!」

芽衣は卵焼きが大好きらしい。私も好きだ。

「芽衣のお母さんは料理上手だね。」

私は、卵焼きを口に入れた。

「いやいや……。私も負けてないよ。」

芽衣はだんだん大きな声になって自慢げに言った。

「なぐに、生意気なこと言ってるのよー！」

芽衣のお母さんは、笑顔でそう言う

「あら！？もうこんな時間！あなたたち遅刻するわよー！」

「うわ！？やばいよ・・・芽衣！」

私と芽衣は「いってきます！」と言って、玄関から飛び出していった。

「楓の家って学校から遠いんでしょう？大変じゃん。」

「はは。でも、毎日走って運動になるから。」

私は笑顔でそう答えた。

私は芽衣の家族が好きだ。みんながいつも笑顔で、私在家で何かがあると家族じゃない私でも、暖かく迎えてくれるのだ。

だから、私もこうやって笑顔でいられるのだと思う。

学校に着くと、もうほとんどの人が来ていた。

「おはよ！」

私は、後ろで友達と話している隼に挨拶した。

「おっす！菜樹はまだだぞ・・・。」

隼は菜樹の席を見ながら、笑って言った。まあ、いつものことだ。

「今日は全校朝会があるんだってさ。昨日の転校生のことだろ？」

「多分ね」。菜樹早くしないと、朝会の日はいつもより早いのに・・・。」

「全く、これだから遅刻魔は・・・。」

ガタッ

「うわ！？」

いきなり隼の椅子が傾いたかと思うと、そのまま倒れて隼はしりもちをついてしまった。

「誰が遅刻魔だってえ・・・。」

その後ろで菜樹が、椅子をつかんで立っていた。

「菜樹。遅いよ！もうすぐ全校朝会だよ？」

「ん？ああ……。時計が止まっててな……。」

菜樹がかばんをおろしながら言った。隼は背中に手を当てて、起き上がると

「ホントかよ……。」

と、苦笑いで言った。

体育館はいつも以上にざわついていた。当然だ、転校生が来ることは全校中に広まっていたのだから。

「今日は転校生を2人紹介します。」

教頭先生が2人の生徒を連れて、ステージに上がった。

「ねえ……。」

私はヒソヒソ声で隼に話しかけた。

「ん？」

「転校生って2人だったんだ……。」

「あの時は１人しかいなかったのにな．．．。」

「女の子は小春ちゃんでしょう？じゃあ、もう１人の男の子はどんな子だろう？」

私はワクワクしながら、前を向いた。

「水瀬小春です。よろしく．．．。」

小春ちゃんは相変わらず、物静かだ。

「フカミクウガ深見空雅です。よろしくお願いします。」

明るい笑顔で挨拶をした、スラッと背の高い人．．．。どこか見たことがあるような。

「水瀬さんは３Ｃ、深見君は３Ｄでこれから一緒に過ごしていきます。」

校長先生は笑顔で話していた。

挨拶をし全校朝会が終わると、またざわつきが戻ってきた。私たちは教室に帰る途中で話していた。

「こっちのクラスにも来るなんて、思わなかったな．．．。」

菜樹は腕を組んで、そう言った。

「どうしたんだ？楓。」

隼は私の肩を叩いて言った。

「え？ああ……。何か、どこかで見たことがあるような気がするんだよね。」

私はそれがずっと引つかかっていた。

「男の方か？」

菜樹は不思議そうに尋ねた。

「うん……。」

「気のせいだろ？だってあんなヤツ、この辺りにいなかったもんな。」

隼は、あんまり気にしていないらしい。

「そうかなあ……。」

私は結局教室に入るまで、ずっと考えていた。

大貫先生が空雅を連れて、教室に入ってきた。さっきまでのざわつきは少し静まり、みんなが先生の言葉を待っていた。

「さつきも朝会で紹介があったが、このクラスに来るってことで改めて自己紹介してもらう。」

先生はそう言うと、廊下に立っていた空雅に手招きをした。

空雅はドアの前で一礼すると、静かに教室へ入って来た。クラス全員が、静まり返っている。空雅は先生の横まで来ると、みんなに朝会のとに見せたあの笑顔を見せた。

「かつこいい」や「可愛い」という声が聞こえてくる中、私はまだ考え込んでいた。

「深見空雅です。まだ知らないことばかりですが、早くこのクラスになじめるように頑張ります。」

空雅はずっと笑顔で話している。

「あの、笑顔・・・何とかなんないのか？」

菜樹がぼそとつぶやいた。

「あれ・・・？」

私は空雅を目で指して言った。菜樹は小さくうなずき、

「苦手だ・・・。」

と、参ったようにつぶやいたのが、聞こえてきた。その声をかき消すように先生が、

「深見は〜……………」

と、言いかけたとき

「僕・・・天川さん・・・あ、天川さんの隣がいいです!」

いきなり、空雅が大声で言った。

「な、何で〜!？」

私はつい、立ち上がってしまった。

「え？何か理由があるのか？」

先生はびっくりして尋ねた。

「あ・・・いや。天川さんの隣がいいなと思って・・・／／／」

空雅は頭をかきながら、照れくさそうに言った。

「じゃあ、楓の隣でいいな。」

先生はそれを見て、笑顔で言った。

「え・・・いいんですかね・・・?」

私は呆れてそう言いながら、また座った。空雅は私の隣までくると、

「よろしく、天川さん。」

そう言っで、かばんをしまっている。

「よ、よろしく……。」

私は戸惑いながらも、軽く頭を下げた。

「じゃ！ホームルーム終了。」

先生は出席簿を振りながら教室を出て行った。
その後も、私はただ一人考えていた。

「……ああ!!」

やっと思い出した。

「え？どうしたの？」

空雅は驚いて、手が止まった。

「思い出した・・・。」

そうだ、スラッとした高い背丈。さわやかな笑顔。どこかで、見たような気がしていたのだ。気のせいなんかじゃない。あのとき、あの場所で・・・。

「橋で・・・会った？」

私は空雅に指を指して尋ねた。空雅はニッコリして、

「橋？」

「う、うん。草むらから・・・出てきた人？だよね？」

空雅は、私の言葉に少しも驚かなかった。

「言ったでしょ？天川っていう子に会う予定だったって・・・。」

空雅はそう言って、こっちを見ている。

「何で？どうして私なの？」

私は気になって、気になって仕方が無かった。

「何ででしょうね？」

空雅はわざと明るく振舞っているように見えた。そこへ、隼がやって来た。

「おっす！俺は隼。よろしくな！」

隼は空雅の肩をポンポン叩いている。

「おい。何でお前、よりによって楓の隣なんだよ……？」

菜樹が間に入って、空雅に尋ねた。

「そうだ、どうして？」

それは私の聞きたかった。

「いや、顔見知りだし……。頼りになりそうだから……／＼／」

空雅は目を泳がせながら、そう答えた。

キンコンカーンコン————。

「やつべ……。俺、かばんしまつてないよ。」

隼がそう言いながら、席に戻って行った。

「1時間目って、数学だったよな？」

菜樹はまだ空雅を横目で見ながら、私に尋ねた。

「う、うん！そうそう・・・。」

私は苦笑いしてそう答えると、教科書を机の中から取り出した。私は授業中も、空雅のことが気になっていた。どうして、私なのだろうか・・・。

放課後の教室で、思い切って聞いてみることにした。丁度、二人きりだ。

「空雅・・・。何で私の隣に来たの？」

空雅はかばんを片付けていたのだが、急に手を止めキョトンとした顔でこっちを見た。そして、少しの沈黙が流れた後、空雅はハツとしたように話し始めた。

「・・・ああ。言ったでしょ？天川っていう子に会う予定だったからだよ。」

「それは、聞いたから分かるよ？でもさ、なんで私に会う予定だったの？」

私はどうして「会う予定」というのが、決まっているのかが分からなかった。空雅は少し考えると、私の前まで来て言った。

「君に初めて会ったとき、“空から来た”って僕言ったよね？それね、冗談じゃないんだよ。ホントのことなんだ！」

空雅の言葉には熱が入っているようだ。私は黙ってうなずくしかなかった。

「僕は、空・・・と言うより、んゝあえて言うなら宇宙かな？宇宙から来たんだよ。」

何を言ってるんだ・・・この人は・・・。

「はつきり言うと、僕は星座なんだ!!」

「はあ!？」

こればかりは黙って聞いてもらえない。

「意味分かんないことばつか言わないで!! からかってるんですよ! 私、これから菜樹ん家よらなきゃいけないの。じゃあね!!」

私は思いつき椅子を入れると、急いで教室を出た。

「空雅なんて、知らない!!」

私は帰りの道で、そんなことを言いながら菜樹の家に向かった。

「そもそも、空から来たって言うところからおかしいんだって! ストーカー? 絶対変だよ・・・。」

菜樹の家が見えてくると、何だかホツとした。

「お！楓か。入れよ。」

菜樹の家は平屋だ。今はお祖父さんとお祖母さんと3人で暮らしている。お父さんとお母さんは、仕事で海外に行っているのだそうだ。

「私、菜樹の家の匂い、大好きなんだ。」

「そうか？そんなにいい匂いがするもんかね。・・・」

「するする！何だかね、懐かしい匂いがするんだよ。」

私は上を見上げて言った。菜樹はそんな私を見つめながら、こう言った。

「楓・・・何かあった？」

「え？あはは・・・何言ってるの？ないない、なぐんにもないよっ！」

「そ、そうか・・・？」

と、菜樹は心配そうに言った。

「うん。あ！そういえば、菜樹！」

と、私は明るく言った。

「今日教室で、空雅の事“苦手”って言ってたでしょ？あれ、どうして？」

私は座って尋ねた。

「ああ・・・あいつさあ、なんか笑顔を自分で作ってるような感じがするんだよなあ・・・」

菜樹もそこに座り込んだ。

「作り笑顔・・・？」

「ああ・・・なんか、そんな感じがするってただけだけど・・・」

「私は、分からなかったな。」

そして、菜樹はまたぼそとつぶやいた。

「苦手だ・・・。」

「そっか」。菜樹はすごいね！」

と、私は笑顔で言った。

「そうか・・・？」

と、菜樹はへらっとして言った。

「うん！鋭いんだもん！！」

私はそんな菜樹の肩をポンポン叩きながら言った。

「いてーよ！」

菜樹が言った。しかし、私の顔を見て急に真剣な顔になった。そして、

「楓、絶対何かあったろ……。」

私が菜樹といると、心の奥まで見られているような変な気分になる時がある。それは、菜樹が真っ直ぐ私を見つめていて、しかも私の考えている事をぴったり当ててしまうからなんだと思う。

そして今、私はまさにそんな気分なのだ。

「な、菜樹………?」

「楓、ホントに笑ってないだろ……。」

「え……?」

「楓、芽衣の口癖知ってつか?」

「え?どうして……?」

私はどうして菜樹がそんな事を言うのか分からなかった。

「いいから!」

菜樹は強く言った。

「あんまり考えたことがなかった……。」

「……後悔しないで……。」

「え?」

「芽衣は自分が後悔したくないし、周りのみんなにも後悔して欲しくないんだ。」

菜樹は私の目を見てそう言った。そして、静かに話し始めた。

「俺さあ・・芽衣に聞いたんだけど。昔芽衣が朝、目が覚めたら急に頭が痛くなった日が1回だけあったらしいんだ。その時はまだ芽衣の兄貴は生きていて、そんな芽衣の様子を兄貴が見に来てくれたんだそうだ」。

—— どうした？大丈夫か？芽衣。

—— なんかね、頭がズキズキするの・・。

芽衣は布団をかぶったまま、そう兄貴に言った。

—— 俺さ、今日は大事な用事があるんだ。だから行かなくちゃいけないんだよ？

兄貴は優しく、芽衣に言った。

—— そ・・そうなの？大事な用事なの？

芽衣は布団から顔を出して言った。

—— そうさ！とっても大事な用事！！

兄貴は明るく笑ってそう言くと、立ち上がった。その時、芽衣はすごく嫌な予感がした。兄貴が遠くに行ってしまうような、そんな気持ちになった。そう思うと、芽衣は兄貴の上着のすそを引っ張って、

—— お兄ちゃん！今日はここにいてよ！どこにも行かないで！お願い！！私の側にいて！！！！

—— 大丈夫・・・芽衣は強いから、俺がいなくても平気だろ？ちよつと出かけてくるだけだ から・・・。

「—— 芽衣は兄貴の笑顔を見ると、何も言えなくなつてしまったんだ。兄貴は、芽衣の頭をなでると最後に玄関で手を振つて、それから・・・。」

「それから・・・？」

「それから、芽衣がどれだけ待っても、どれだけ呼んでも、兄貴は戻つてこなかったんだ。途中で、車が突っ込んできて、それで死んじゃったんだ・・・。」

「・・・・・・・・。。。」

「その日は、芽衣の誕生日で・・・兄貴は芽衣の誕生日プレゼントを買いに行っていたらしい。手には、ピンクの手袋を握りしめてたつて・・・・・・・・。」

気づいたら、菜樹はうつむいていた。

「菜樹・・・菜樹・・・・。。。」

私は菜樹の前で、しゃがみ込んで泣いてしまった。芽衣にこんな過去があつたなんて知らなかった。芽衣はいつも明るいけど、そこまでは話してくれなかったのだ。

「楓・・・」

お兄さんはどうして、芽衣の言うことをしっかり聞いてあげなかったんだろう。私が芽衣の立場だったら、“どうしてお兄さんを止める事ができなかったんだろう。どんな事をしてでも止めていれば、何かが変わっていたかもしれないというのに・・・”と、きっと思うだろう。もしかしたら芽衣も、今までこんな気持ちと戦ってきたのかもしれない。

「楓？」

菜樹が呼んでいる。私は声が出ない。私は今、芽衣のお兄さんと同じ事をしているような気がする。そうだ。私は空雅の話を聞いてあげなかったではないか。

「ど、どうしよう・・・私、最後まで話・・・聞いてあげられなかった・・・」

私はどうして気づかなかったんだろう。空雅があんなに真剣な顔で、真っ直ぐ私の目を見ていたのに。聞いてあげるくらい、私にだってできたのに・・・私は空雅にひどいことをしてしまったんだ。

「まだ後悔するのは早いんじゃないのか？」

菜樹は私の顔を見て言った。そうか、空雅に謝らなくちゃ・・・。そして、話を聞いてあげなくては・・・。

「ごめん、菜樹！私行ってくる！！」

私はそう言つと、菜樹の家を飛び出して、急いで学校に向かった。

「勝手に話してごめんな……。芽衣。」

菜樹は1人になると、座り込んでそうつぶやいた。

「菜樹は何でも分かっちゃうんだなあ……。」

私は走りながら参ったように笑つと、今度は心配になって

「空雅、まだいるかな……。？」

そうつぶやいた。

学校は静まり返っている。

ガラッ

教室のドアを勢いよく開けた。そこには黒板を消している空雅がいた。

「忘れ物？天川さん。」

空雅はこっちへ来ながら尋ねた。

「ううん。ちょっと、空雅に……。」

息が切れている私に空雅は

「ちょっと、座りなよ……。」

と、優しく言った。

「また泣いた……？」

空雅は私の顔を見て言った。

「ん？いやいや……。そんな事より、空雅。さっきの続きを聞きに、私ここへ来たの。」

私はニッコリして空雅に言った。空雅は始めは少し驚いたように

「え！？あ！！そうなんだ……。でも、信じてくれるの？」

そう心配そうに言った。

――“後悔しないで”

私は、少し考えて

「それは、聞いてから決める事にしたの！」

と、顔を上げて言った。空雅は急に笑顔になると、静かに話し始めた。

「空を見上げるとたくさんの星があるよね？その星たちをつなぐ、星座というものがあるでしょ？これは昔、神様が人間や動物を星に変えたものなんだ。」

「神様を変えたんだ。」

「そう。僕も星に変えられた中の1人なんだよ。まあ、1人っていうより1匹って言った方があれなのかな？」

空雅はそう言って1人で笑っている。

「1匹……。？」

私は空雅の表現の意味が分からなかった。

「うん。僕は犬の星座なんだ。大犬座。」

空雅が、何だか嬉しそうに話しているので、私も聞くのが楽しくなってきた。

「大犬座は、何で星になったの？」

私は空雅のすぐ前まで来て、そう尋ねた。

「あはは……。それがね、昔の話なんだけどさ。その頃、誰にも捕まえる事ができないキツネがいてね——。」

そのキツネは毎日畑の野菜を食べてしまったり、花を荒らしたりと・いたずらばかりしていた。しかし、キツネを捕まえようとすると、すぐ逃げてしまい、誰にも捕まえる事ができずにいたのだ。そんなある日、

——この犬を使おう！

と、ある村人が言った。その犬とは、どんな獲物でも絶対に捕まえる事ができる、そんな足を持った犬だったのだ。

——“絶対に誰にも捕まえる事ができないキツネ”と“絶対に獲物を捕まえる事ができる　犬”か……。面白い。このキツネには、困っていたところだ。やってみる。

そう、王様が言った。

さっそく、その犬にキツネの匂いをかがせ、キツネを見つけると、犬は走り出した。キツネも犬に気づくと、走り出した。キツネはとても足が速い。しかし、犬もとても足が速い。こうなるともう誰も止める事はできない。2匹はいつまでも走り続けるのだった。

——さてどうしたものか・・・

と、頭を悩ませていたのが、大神ゼウスだ。しかし、どうにかして止めなくていけない。そこで、2匹を石に変え、今まで悪さをしてきたキツネをそのままにし、人のためにキツネを追いかけた犬を、空に打ち上げ、星に変えてあげることにした。

「——そして、その犬が僕ってわけさ！」

空雅の説明を聞いていた私は、

「え？で、空雅はどうしてここに来たわけ？」

と、尋ねると

「ああ・・・それを言ってなかったね。僕は星座の世界では“シリウス”と呼ばれているんだ。つまり、“深見空雅”っていうのは人間の姿の時に使う、仮の名前って事！」

と、明るく言った。

「シリウス」・・・？」

「うん！他にもいるよ？“スピカ”や“アルタイル”、“ポルックス”や“アンタレス”ってね！みんなその星座についている星の名前なんだ。」

聞いた事のある星の名前もあつて、私は早く続きを聞きたくなって言った。

「すごい！で？続き、続き！！」

「お！食いつきがいいね。・・・その星座の世界に、ある日大事件が起こったんだ。」

——おい、シリウス！ロキ、見てないか？

——え！？いないの？・・・知らないなあ。

——おかしいな・・・。お前の所にいると思ったのに・・・。

“ロキ”というのは、子犬座の事だ。名前の通り小さな子犬で、僕の兄弟のような存在だった。オリオン（仲のいい友達）の話では、そのロキが、いきなりどこかへ行ってしまったらしい。

——ロキ～！ロキ～？

—— おゝいロキ！！もうご飯だよ？

ロキは1日中どこを探しても、いなかった。

—— 大神ゼウスの所へ行こう！あの人なら、何か知っているかもしれない・・・。

それから、僕たちは大神ゼウスの所へ向かった。大神ゼウスはみんなが小さい頃から、ずっとお世話になっている。みんなのお祖父さんのような存在だった。

—— ゼウス！ロキがどこへ行ったのか、知りませんか？

そんな僕たちの言葉に、神様は黙ったまま静かに手を出して、そのまま下を指差した。

—— え！？どういうことですか？

僕は大きな声で言った。

—— そのままの意味だよ。あの子は地球に行ったんだ・・・。

大神ゼウスは悲しそうに、そう答えた。

—— そんな・・・。どうして？何の用事で・・・？

スピカが下を見て言った。

—— たった1人で、行ったんだ。きっと相当な事じゃないと行けないよ。

大神ゼウスは立ち上がってそう言うと、次は僕の前までやって来て、

シリウス。お前が探しに行くんだ……。きっと、ロキは人間になって向こうにいると思う。だから、お前も人間になって、探すんだよ？

—— そんな・・！？１人でなんて無茶ですよ！！

と、ベガが驚いて、大神ゼウスに言った。

—— これも、修行の１つだ。お前たちも地球に行って、修行をしたらどう？

と、大神ゼウスは当たり前のように答えた。

—— でも、シリウスはまだ……。それにロキを探すとなると・・。

—— たしかに。シリウスは地球に行くにはまだ早い年かもしれない。だが、シリウスにはできる、わしはそう思うんだよ・・。

大神ゼウスの言葉に、みんな黙ってしまった。

—— 僕頑張ります！神様。絶対、ロキを連れて帰ってきます！

僕はそう心に決めた。

—— 向こうで、仲間を作って一緒に探しなさい。お前が星座だと

いう事は、その仲間以外、

誰にも言っではいけないよ。

—— はい——！

「—— と、言うわけなんだ……。複雑だけど、分かった？」

空雅は難しそうな顔をして言った。

「じゃあ、私は空雅と協力して、その“ロキ”を探せばいいんだね？」

私は明るく言った。空雅はそれに驚いたようで、

「あ……え！？」

と、少し嬉しそうだった。

「私、信じてみる事にしたんだ！」

私はそれを見て、笑顔で言った。

「じゃあ、一緒に帰ろうか！」

空雅もご機嫌のようだ。

私と空雅は、帰り道で空雅の故郷について話した。そこで分かったのが、星座の世界には仲間がたくさんいるという事。その中には悲しい過去を持った人たちもたくさんいるという事。それと、

「僕はね、冬の星座なんだ。だから、冬になる前に口キを連れ戻さなくちゃいけないんだ。」

空雅は真剣に言った。

「そっか、じゃあゆっくりって訳にはいかないんだね？」

「そう。だから、こうやって天川さんに手伝ってもらおうってなったんだ。」

「へっ。。。あ！」

私は思い出したように言った。

「そういえば、どうして私の隣の席に来たの？」

空雅は小さく「あ。。。」「と言って照れくさそうに言った。

「僕、学校へ行ったことがないんだ。だから、ちょっと心細くて・・・
。／／／」

「え？学校に行ったことがないの！？」

と、私は驚いて大きな声になってしまった。

「うん……。僕がいた所には学校がなかったから……。」

空雅は苦笑いで言った。

「それに、隣だと何かと便利だし！」

そして、付け足したように明るく言った。

「そっか！だから私なんだね！！」

私は納得して言った。

いつもの踏み切りまでくると、空雅が

「じゃあ、僕こっちだから！」

と、私と反対側を指差しながら言った。

「私はあっちだから！じゃあ、また明日ね。」

私は空雅に手を振ると、踏み切りを渡って家に向かった。

家の中は明るかった。私以外の家族の音がする。

「ただいま……。」

私は明るい家とは反対に、暗い気分で玄関のドアを開けた。昨日の事があってから、家に帰ると気分は最悪だ。

「誰も気づかない……かぁ……。」

私はへへへと小さく笑うと、そのまま階段を上がって部屋に向かった。そして、そのままベッドに横になった。

「うわぁ……。今日は、頭に入れること多すぎだ……。」

そうつぶやくと、スーッと体の力を抜いた。

「でも……、引っかかった事が分かったから……何だかスッキリしたみたい……。」

そこまで言うと、私はそのまま眠りについた。

私が目を覚ましたのは、5時くらいで、外はもう明るかった。ふと下を見ると私の体には布団がかかっていた。

「あれ・・・？私布団かけて寝たっけな？」

不思議に思ったが、早く起きたのでベランダに出て、深呼吸をした。朝の涼しい風が吹いていたこともあり、何だか落ち着いていた気分になった。できれば、家族に会わないで学校へ行きたい。しかし、それは難しい事だと思う。朝食を抜くというような気にはなれないし、下に行かないと外に出る事はできないからだ。

「しょうがない・・・か。」

私はそう言って、階段をゆっくり下りて行った。

下を下りて、リビングに入るとまだ早いのに母が朝食を作っている

た。

「あら、楓。おはよう。」

母は優しく言った。

「おはよ・・・。」

私も、とりあえず返した。

「今日は早いね。何かあるの？」

母は、私に背を向けたまま話かけた。

「ううん。早く起きちゃって・・・。」

私は目を擦りながら答えた。私は早い朝食を食べて（ご飯やおかずが出来立てで、温かい気持ちになった。）それから小さく「行つて来ます・・・。」と言って家を出た。

時期的にはもうすぐ秋なのかもしれないが、外はまだまだ夏の空気が漂っていた。電車が来ない踏み切りは、静まりかえっている。気持ちの良い風が吹く中、私は学校に向かった。

学校が見えると、気分が少し明るくなる。友達がいれば、もっと

明るくなるんだろうが、今日は人の気配さえ感じなかった。そのま
まゆっくり階段を上がり、教室に向かった。（途中の水道をうつか
り通り過ぎてしまい、また少し戻って髪を整えた。）教室のドアを
開け、私は中に入った。

静かな教室は、前にも味わったことがある。たしか、夏休みが終
わって最初の日だった。あの時は、珍しく菜樹が早かったんだよな
あ……。あと、隼がドアで頭をぶつけてたっけ？そうそう、転校生
が来たからだったよね。小春と空雅だ。

「空雅って、本当に空から来たのかなあ……。」

私はポツリとつぶやいた。

「でも、あんな嘘ついたって何の得もないよね……。」「

私は窓を開けて、朝の風を教室に入れた。

「真剣に話してたみたいだし……。」

そう言って、自分の席に座った。

「あゝ、私、信じてみるって決めたじゃん……。」

私はいきなり思い出したように言った。そこへ、

「あ、おはよ……。いたんだ天川さん……。」

空雅だ。

「うわ！？く、空雅！？早いね。」

私はものすごく驚いた。

「1人で何してたの？天川さんは1人にすると、すぐ泣いちゃうかなあ・・・。」

空雅は私を少しからかっているようだった。

「そ、そんなに泣いてないって！」

私はそう言って、手を振った。

「面白いなあ・・・。天川さんは・・・。」

空雅はスクスク笑いながら言った。

「ねえ、空雅。」

「ん？何？」

「あのさ、“天川さん”って止めない？」

私は、ずっと気になっていた。

「え？何で・・・？」

空雅はキョトンとしている。

「だって、みんな呼び捨てだし……。それに、これから一緒に口キを探していかなくちゃいけないでしょ？」

私は笑顔でそう言った。空雅はそんな私を見て、嬉しそうな顔をしていたのだが、その後少し考えて言った。

「じゃあ、何て呼べばいいの？」

「“楓”でいいって！」

私はまだ笑って言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

空雅は黙り込んでいる。

「・・・・・・・・どうしたの？空雅。」

私は空雅の顔をのぞき込んだ。空雅は何だかすごく考え込んでいるようだ。

「そんなに悩まなくても・・・・・・・・。」

と、言いかけたその時。

「かえ・・・で・・・？」

空雅が何かを言いかけた。それを聞いた私は、

「え？何って・・・？」

と、言うと空雅は大きく息を吸って、

「か、楓！！！」

と、大声で言うもんだから、

「うわ！？」

ガタガタガタン

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・大丈夫？」

空雅は倒れた椅子やずれた机を整えながら、私に尋ねた。

「・・・・はは。」

「え！？」

空雅は少し驚いた。

「あはははははは・・・・。」

私は転んだままいきなり笑い出してしまった。

「な、何で笑うの!？」

と、空雅は私の隣まで来て言った。

「ははは・・・だ、だって・・・空雅が・・・あははははは。」

私はなかなか笑いが止まらない。

「一生懸命なんだもん・・・はは。」

面白い。空雅がこんなに面白い人だったなんて。

「そんなに笑わなくてもいいじゃんか・・・。」

空雅はシュンとして小さくつぶやいた。

「ごめん、ごめん・・・。空雅は面白いね。」

私はまだ少し笑いながら言った。

「どこがだよ・・・。」

空雅も参っているようだった。

ガラガラガラ――。

「おーっす！」

隼が元気よく入って来た。

「隼！おはよ！」

私と空雅は一緒に言った。

「おはよ．．。」

この声は、隣のクラスの小春だ。私は小春の席まで来ると、大きな声で言った。

「おはよ！小春！！」

「あら．．、楓。おはよう．．。」

小春はいつものように、物静かな雰囲気を漂わせていた。

「ハロー！！」

一緒に隣のクラスの芽衣が教室までやって来た。

「芽衣！おはよ。」

私は嬉しくなって、抱きついた。そのすぐ後ろから、

「おはよー！」

これは珍しい。なんと菜樹だ。

「おいおいおい……。今日はヤリでも降るんじゃないだろうな……」

隼が菜樹を見ながら言った。

「うつせえ！」

菜樹は短くそう言つと、ささつとかばんを片付けてしまった。

「深見……。お前、何してんだ？」

いきなり、隼が空雅を見て言った。

「へ？」

空雅がこっちを向いて言った。

「けっさくね……。」

小春が言った。

「く、空雅……。どうしたの……。？」

私は自分の目を疑った。ここにいるみんなが、空雅を見ている。

それは空雅が、今まで作ってきた笑顔とは違い、自然に出てきたよ

うな・そんな笑顔で立っていたからだ
。

第2章・不思議な転校生（後書き）

ありがとうございました！

次話もよろしくお願いしますw

第3章・新しい仲間

私がこの学校に入学してすぐに聞いた事だが、この学校を2年前に卒業した先輩の中に先生も手に負えないような問題児がいたらしい。その先輩は私が入学してすぐに転校してしまったらしいが、今でも生徒や先生の中で噂になっている。

そして、その問題児が再び私たちの前に姿を現すことになるなんて、誰が予想しただろう――。

空雅がこの学校に転校してきてから、2週間がたった。空雅はすっかり学校にも慣れ、他の生徒ともなんら代わりのない生活を送れるようになってきた。1つ、慣れない事といえば……。

「か、かか、楓……／＼／」

いまだに、私の事をすんなり名前で呼んだ事がないという事だ。

「女の名前も呼べないくせに……。それでも男か？」

菜樹は空雅にそう言う。

「君だって、男じゃないじゃないかあ！」

空雅は私だけでなく、他の女の子の名前も呼べないようだ。

「俺は外だけ女なんだ！他の奴らと一緒にするな！！」

菜樹はそう言うと、空雅に向かって消しゴムを投げつけた。

「いて！何するんだよ！」

と、まあ。こうやって空雅で遊ぶのが、最近のみんなの中でブームになっている。私は、空から来た空雅が、こうやって人間と一緒にうまくやっていけていて、安心していたところなのだ。

しかし、ロキ探しの方はなかなか進まず、どこから探せばいいのかも分からないのであった。何たって、世界には人間が数え切れないほどいるのだから。

放課後は、ロキを探すためにベランダで話し合いをする時間になっている。

「ねえ、ロキがどんな人間になりそうかくらいは分からない？」

私は、なぜかベランダをほうきではいている空雅に話しかけた。空雅は手を止め、

「ロキは元々おとなしい子だけれど、性格を変えてるかもしれないから……。そこまでは分からないんだよね。」

と、困ったように言った。

「じゃあ、この学校じゃないかもしれないって事だよね?」

と、私は空雅のところまで行って尋ねた。

「うん。でも、大人にはなれないと思うなあ。だって中身は同じなんだから、元は子供なのに、大人を演じるのは難しいんじゃないかなあ……。」

「じゃあ……。そうやって、少しずつ絞っていくしかないね!」

私は明るく言った。

「か、楓……。ここ、なんで穴開いてんの?」

空雅が、壁の穴を指して尋ねた。もちろん“楓”の部分だけ詰まらせて。

「穴……。?ああ、それね先輩がやったんだって。」

私はあの噂の先輩の話をした。

「空雅は来たばっかだから知らないかもしれないけど。私たちの2個上でさ。すぐに、ケンカしたり物を壊したりして相当問題児だったらしいよ!」

「うわ・・・怖いね。名前は？」

「それが、名前は分からないの・・・問題児とか、暴れん坊って呼ばれてるから。」

「それは、相当問題児だね・・・。」

と、空雅は苦笑いして言った。

「高校、行けたのかな・・・？」

と、私は不思議になって言った。

「大丈夫なのかな・・・？そういう人は・・・。」

空雅は高校についても、勉強したらしい。

「空雅は人間の話についていけてすごいね！」

「いや・・・勉強したからだよ。僕は小心者だから・・・//」

空雅は照れくさそうに、そう言った。

「そう？でも、小心者はこんな所来られないって！」

私は本当にそう思って言った。

「そっか・・・。」

空雅は、また自然に顔が笑顔だった。

「うん！」

私は、いつまでも空雅のその笑顔を絶やさないようにしたいな・・・
と思った。

その日から何日かたったある日の朝、校門の辺りで偶然空雅に会った。

「あ！空雅～！！」

私は校門で突っ立っている空雅に声をかけた。空雅は私に気づくと、そのまま学校の方を指した。

「・・・へ？」

私は何が何だか分からないまま、空雅の所まで走って行った。校門から学校の方を見ると、たくさんの人が集まっている。

「あつちに何かあるのかなあ・・・。」

空雅も何が何だか分からないらしい。背伸びをしながらそう言った。

「ちょっと行ってくるね！」

私は空雅にそう言うと、野次馬の中に消えていった。

「大丈夫かなあ……。」

空雅は校門の上に乗って、野次馬の中を見てみた。その時、私はやつとかき分けて、間に来るとみんなの視線の先を見た。

「あれって、あの暴れん坊だよね……。」

「どうしてここにいるんだ……？」

という、周りの声。

「あ……。」

空雅は校門の上から言った。

「うそ……。」

私は野次馬の中で言った。

そして、2人が思った。いや、ここにいる全員が思っただろう。

あれが、噂の問題児・・・！？

学校で噂だった暴れん坊。それが、今私たちの目の前にいる。

「でも、何でここに？しかも寝てるみたいだし・・・。」

私は独り言を言った。

「寝てるよね・・・誰かを待ってたのかも。」

空雅はあの暴れん坊を見て言った。そう、暴れん坊は木の木陰で眠っているのだ。

キンコンカーンコン

チャイムが鳴った。もう、朝の会が始まる時間だ。

「おい！何やってんだ？」

大貫先生の声がしてきた。

「先生、静かに！！」

隼が、先生に言っているようだ。しかし、もう遅かった。周りからは“キヤーキヤー”叫ぶ女子生徒の声や“ヤベエよ……”などボソボソ話している男子生徒の声で、あふれている。その視線の先には、

「ふああ……。」

あの暴れん坊がムクツと立ち上がった。

「……………」

沈黙が流れた。そのうちに1人、2人と次々に教室に戻っていくの

が分かった。それがだんだん多くなっていったので、最後の方はほとんど全員が走ってその場から離れている。私も、とにかく安全な場所に行こうと思い、立ち上がったとたん。

ドカッ

誰かにぶつかった。そして、

「きゃっ！」

私はバランスを崩して転び、おまけに足までひねってしまった。

「いったあゝ……。」「

周りを見ると、あっという間に誰もいなくなっていた。1人で座り込んでいる私と、校門からこちらを見ている空雅を除いて。

「おい！！楓——！！！！」

みんなは教室に戻って、窓からこっちを見ている。私は足が痛くて動けない。

「ど、どうしよう……。」「

暴れん坊はこっちに気づいたらしい。ゆっくりこちらに歩いてきた。

「何、怖がってんだよ。」「

「……………」

暴れん坊は静かに言った。しかし、私は怖くて声が出せなかった。

「あ……………つまんね……………」

「……………」

何だ？どうしてそんなに寂しそうな顔をしているんだろう……………。

「何だよその目は！お前も怖いんだろ？さつさと逃げりゃーいいじゃないかー!!」

私はいきなり怒鳴られたのに驚いて、痛い足も忘れてその場から逃げて行った。

「良かった……………楓、大丈夫？」

芽衣は心配そうに私の顔をのぞきこんだ。

「……………うん。」

私はさっきの顔が気になって仕方がなかった。

「ごめん、さつきすぐに助けに行けなくて……………」

空雅が申し訳なさそうに謝った。

「いいよ。私たいしたケガしてないんだもん。」

私は笑顔で答えた。

「そっか……。ありがと。」

空雅はホッとして、

「でも、気をつけなくちゃいけないよ？目つけられてたら大変だし・
。」

と言って、自分の席についた。

休み時間。私は用事があつて、職員室まで来ていた。その廊下に、あの暴れん坊が座り込んでいた。

「（どうりで、人が通らないわけだ……。）」

私はそんなことを考えながら、職員室に入った。

「先生、持って来ましたよ。」

「お、サンキュ。」

大貫先生はニコニコしている。

「どうしたんですか？嬉しい事でもあつたんですか？」

私もニコニコして尋ねた。

「いやゝ？何でもねーよ？」

「ホント？」

「ああ。その内お前らにも分かるからさ。」

先生は私の頭をなでると、職員室の奥へ入って行ってしまった。

「その内分かることって何だろう・・・。」

私はそんな独り言を言いながら、職員室を出てきた。

「（まだいるよ・・・。）」

暴れん坊はまだ座っていた。

「（あれ・・・？）」

また寂しそうな顔だ・・・。

「（どうしよう・・・。話しかけようかな？話してみたら、案外いい人かもしれないし・・・。）」

私はそんな感じでいろいろ頭で考えていた。その内に、暴れん坊の前まで来てしまった。

「・・・あ。」

「・・・何だよ。」

「い、いえ！別に・・・。」

私はとつさに言ってしまった。私が“しまったなあ・・・”と思っていた時、

「・・・またお前かよ・・・。」

暴れん坊がぼそつとつぶやいた。

「・・・お、覚えてたんですね！」

私は大きな声になってしまった。

「何で、嬉しそうな顔してた？」

「はは。いや、覚えてくれたんだなって・・・。」

私は笑顔で言った。

「は？・・・何だよそれ・・・。」

暴れん坊も少し笑っている。

「そつえば、どうしてあの時、あんな寂しそうな顔してたんですか・・・？」

「んあ！？な、何言っただよー!!」

暴れん坊は少し怒っているようなので、私は言ったことを後悔した。

「いや、いいです！ごめんなさい・・・!」

「あーもう、謝んなー!!こっち来い!!」

私は暴れん坊にグイッと引っ張られた。

「・・・ええ!？」

そしてそのまま、どこかに連れて行かれてしまった
|。

ここは、屋上だ。

「ちょ、何なんですか!？」

私は暴れん坊の手を振り払って言った。

「なあ、授業サボっちゃわない？」

「嫌です!! 私帰りま……。」

キンコンカーンコン

「……あ。」

私は上を見上げて言った。

「あーあ、鳴っちまったな……。」

暴れん坊は頭をかきながら言った。

「（まあ、いいや……）」

私も少しヤケクソになっている。

「あ、あの……。」

「……“伊吹”……。」

「……え？」

「……俺は伊吹^{イブキ}だ。赤星^{アカボシ}伊吹。」

伊吹は校庭の方を見ながら、言った。

「それと、敬語はいらない……。」

とも付け足した。

「……へえ。私は、“楓”だよ。」

「って！いきなりかよ……。」

伊吹はカクツとなって言った。

「だって、敬語じゃなくていいって言ったでしょ？」

私はニコニコして言った。

「ま、まあ。いいけどよ……。」

伊吹は苦笑いで言った。

「敬語はめんどくさいもんね。」

私はケラケラ笑っている。

「楓って、俺の事怖くないのか？」

そんな私を見て、伊吹は不思議そうに尋ねた。

「え？だって、伊吹に私何もされてないもん。」

私はキョトンとして答えた。

「・・・は？ははは・・・。確かにな。」

伊吹は笑って言った。いい顔もできるんだなと私は思った。

「ねえ、さっきも聞いたけどさ、何であんな寂しそうな顔してたの？」

「・・・そんなこと言われるのは初めてだな・・・。」

「それって、伊吹が怖くてじゃない？」

「それだよ・・・。」

「・・・え？」

伊吹の言葉に私は驚いた。

「それって？」

「・・・怖がられる事。」

伊吹はまた、校庭の方を見て言った。

「・・・ホントはそういうの、あんまり好きじゃないんだ。」

「楓だから、言うけどさ。俺、人間じゃないんだ。」

「はあ!？」

出た・・・。2人目だよ・・・。

「え?じゃあ、宇宙人・・・?」

私は恐る恐る尋ねた。

「いやいやいやいや・・・。星だよ!星座!」

「えええええ!？」

星座ということ自体はそこまで驚かなかったが(空雅もあるし)、伊吹が星座だったということで、かなり驚いた。

「まあ聞け。で、俺はオリオン座なんだ。オリオンは元々人間で、毎日森で狩りをしていたわけだ――。」

そんなある日。

—— あんなところに女の人がいる……。何やってんだろ？

オリオンはこんな森の中、1人でいる女の人を見つけた。

—— あの……。。

と声をかけた。女の方はきれいな髪を揺らし、サラッと振り返る。

—— 何か……。？

オリオンは驚いた。なんとその女の方は女神だったからだ。

—— あなたは、女神ですよ？

—— そうよ？

—— どうしてあなたのような人が、こんなところに？

—— あなた、狩りをしているわね？私も狩りをしていたの。

女神はニコツとして言った。

—— そうなんですか！？

—— ははは。じゃあ、一緒にやらない？

—— はい！

それから2人は毎日一緒に狩りをするようになった。それはあっという間にウワサになり、女神の兄の耳にも届いた。

何だって！？人間なんかと一緒に！？

それを知った女神の兄は、女神が帰ってくると、

お前、オリオンという奴と一緒にいるらしいな。

オリオンはいい人よ？

女神は笑顔で言った。

お前、まさか……。そいつが好きなんじゃないだろうな……。？

兄はまさかと思い、尋ねた。

そうね……。多分好きなんだと思う。

な、何言ってるんだ！あいつは人間なんだ。お前は女神なんだぞ！？

知っているわ！でも……。

駄目だ！！

女神の兄はそう言って、女神とオリオンのことを反対した。

—— オリオンめ……。覚えていろ……。

その日の夕方、女神の兄は海岸にオリオンを呼び出した。

—— あれ？確か、ここで待ち合わせだったはずなのに……。

兄の姿はないようだ。

—— フツ。オリオンめ、終わりだな。

岩陰に隠れているのは、兄だ。兄はそう言うと、毒サソリをオリオンがいる海岸に放した。

—— いたっ！

オリオンは足の方を見た。そこにはなんとサソリが歩いているではないか。

—— どうして？……………つぐあー！！

バタッ

オリオンはサソリの毒が回り、あっという間にその場に倒れてしまった。

次の日の夕方、女神の兄は女神を海岸に呼び出した。

何？またオリオンと私のこと反対するんでしょう？何言っても駄目なんだからね！

違うよ。たまにはゆっくり話をしようと思ってさ。

兄はニツコリして言った。

まあ、そういう事ならいいけど・・・。

女神はそう言って座り込んだ。

狩りの方はどうなんだ？

兄は海の方を見ながら尋ねた。

結構出来てるわよ？そういえば、お兄ちゃんには見せたことなかったわね。今度見せてあげる。

そうか、俺だってすごいんだぞ？

兄はそう言って、海の方こうの方を指差した。

あそこの黒い点だって当てることができるんだ。

海の遠くの方に小さな小さな黒い点が見えている。

—— まあ。お前にはできないだろうけど・・・。

兄がそう言うのと、今まで黙っていた女神が口を開いた。

—— できるわよ！私だって！

そういつて、自分の矢を取り出した。

—— 見ててよ！

女神が矢を放つと、見事に矢は黒い点に当たった。

—— ほら！できたわ！

女神は後ろを振り返って言った。

—— ……あれ？

しかし、そこにはもう兄の姿はなかった。

その後、女神は自分が矢を当てた黒い点の正体を知って、
驚いた。

—— き、きゃあああああああああ！！

何と、その正体は兄の毒サソリに刺され、海に流されていた才

リオンだったのだ。

—— わ、私はオリオンを・・・？

女神は自分の大好きだったオリオンを殺してしまったと思い、いつまでもいつまでもオリオンから離れなかった。

—— ごめんね・・・。ごめん・・・オリオン。

女神はいつまでも、いつまでも、謝り続けた。そして、

—— 私には大神のように、あなたを生き返らせることはできないわ・・・。でも、あなたを星にすることならできる力を持つてる・・・。

そう言うつと、女神はオリオンを思いっきり空に打ち上げて、星に変えたそうだ。

「—— で、俺は星座になったんだ。」

伊吹はいつも間にか、その場にしゃがみ込んでいた。

—— “ 悲しい過去を持っている人もたくさんいる。”

「 そうだったんだ・・・。」

私は空雅が言っていたことを思い出した。

「俺は、女神に殺されたんだ・・・始めはそう思っていた。それで、誰も信用できなくなった。」

「じゃあ、さっきのことはどうして分かったの？」

「大神ゼウスが教えてくれた・・・。」

伊吹はうつむいたまま言った。

「でも、もう遅かったんだ。その頃にはもう、俺の周りには誰も寄ってこなくなっていて・・・だから、それが分かってからも周りの人が、なかなか信用できない・・・。」

「・・・。」

私は何を言えいいのか分からない。

「俺はあの人に出会わなかったらよかった・・・。人なんか、信用しなきゃよかったんだ・・・。」

「でも、そんなこと言ったら、いつまでも・・・。」

私は伊吹に言った。

「駄目なんだよ・・・。俺は・・・。」

伊吹はだんだん声が小さくなっている。

「でも、そうやって私に話してるじゃん！」

私は大きな声で言った。

「……へ？」

伊吹は顔を上げた。

「そんな大事なことを、そうやって私に話してるじゃん!!」

「……。」

「できないことは、ないよ!それに……。」

「それに……?」

伊吹は不思議そうに尋ねた。

「オリオンを自分が殺したって思い込んでる女神さんの方が、苦しんでるよ!今も……。」

私はさっきよりも大声で言った。

「……な、何言ってるあ!」

伊吹が言った。

「（・・・？壊れた？）」

私はそう思った。

「そんな事言う奴がいるとは思わなかった・・・。」

伊吹は立ち上がって言った。

「・・・。」

「ぶっ・・・。」

「・・・ええ！？」

伊吹がいきなり笑い出した。

「な、何！？」

「お、お前・・・。“女神さん”って何だよ？女神にさん付けしてどうすんだよ・・・。」

「あれ？だって偉い人だし・・・！」

「あははは・・・。絶対バカだろう・・・。」

「そうかなあ・・・あははは・・・。」

2人の笑い声が、屋上で響いた。

その帰り、空雅と一緒に歩いていた。

「何で、4時間目こなかったのさ！」

空雅は少し怒っているようだ。

「いやゝ。ちよつと、伊吹に呼ばれちゃって・・・。」

「伊吹！？誰だよ、その男！！」

「それは・・・って！彼氏みたいなこと言わない！」

私は笑いながら言った。

「ごめん、ごめん・・・で、誰？」

「暴れん坊だよ、あの問題児。」

私はそれを言ってから後悔した。

「えー！？あいつと一緒にいたの！？」

空雅はまた怒って言った。

「・・・うん。」

「もお、あれだけ気をつけろって言ったのに・・・。」

「なあ！楓！！」

隼が口をはさんだ。

「え！？」

私は驚いて、振り向いた。

「あの暴れん坊が！？あの人、心許した人じゃないと、名を明かさ
ないんだってさ。すごいじゃん、楓。」

隼は身を乗り出して言った。

「・・・それは、誰もそこまで親しくしようとしなからでしょ？」

私はサラッと言った。

「・・・え？」

みんなは驚いている。

「・・・確かにさ。そうかもしれない。」

菜樹が言った。

「伊吹は面白いよ！今度ここに連れてきてあげる。」

「おお。」

みんなはまた驚いていた。

次の日の朝。私は一人で通学路を歩いていた。

「枯れ葉がいつぱいだな。」

私はそんな独り言を言って、今日の学校を楽しみに学校へ向かっていた。

トンッ

「・・・あ。」

私は誰かに軽くぶつかった。上を見上げると、

「何だ？」

高校生の男の人だ。

「いつてーなあ……。」

「す、すいません、ごめんさい……。!」

私はすぐに謝った。しかし、

「……。謝っても許してやんない。」

「……。え!？」

その高校生はニヤリとそう言うと、私はグイッと人気のないところに連れて行かれてしまった。

「ちょ、ちょっと!離してください!!止めてください!!」

私がどれだけいつても暴れても、離してはくれない。

「おい、連れてきたぞ!」

高校生は誰かに手を振っている。

「……。え?」

私は自分の目を疑った。

「おせーじゃん！」

「待ちくたびれた。」

「悪い、悪い……。この子、暴れるからさ。」

彼が手を振る先には、この人の他に6人くらいの仲間が待っていたのだった。

「何？結構可愛いじゃん。」

と、私は高校生に頭をなでられた。

「（どうしよう……。このままじゃ……。）」

「こっち連れて来て。」

「はい！」

またグイッと引つ張られた。

「た、助けてーーーー！！！！！！！！」

私は精一杯の大声を出した。

「だ、さわぐな！うるせえ！！！！」

私は相手がひるんだうちに、腕に噛み付いた。

「いつてえ!!」

少し離れた隙間からすり抜け、どうにか逃げ出すことができた。

「逃げたぞ!!」

「追いかける!絶対逃がすな!!」

私は振り返らずとにかく走り続けた。

「こ、ここまで来たら・・・。」

私は息を切らして言った。

「いたぞー!!」

また高校生の声がした。

「ええー!!?」

私はまた走り始めた。しかし、体力には逆らえなくて足はだんだん止まっていった。そんな私の前に姿を現したのは、

「……い、行き止まり!？」

私はすぐに引き返そうとしたが、遅かった。

「見つけたよ。」

ど、どうしよう……。

1番前にいる1人がこちらに近づいて来た。

うわああ!やられる————!!

“もうだめだ”と思い、私は目をつむった。相手はすぐそこまで近づいて来ている。

その時————!!

ザッ

あ……れ……?何も来ない……。

私はほんの少しだけ目を開けてみた。私の目の前は、なぜか影になっている。

「え・・・？」

恐る恐る目を開けてみると、

「く、空雅！？」

なんと空雅が私の前で大きく手を広げて、立ちふさがっているではないか。

「か、楓に手を出すな！・・・な、殴るなら、僕を殴れ！！」

空雅が高校生に向かって言っている。足はガクガクだが・・・。

「空雅・・・。何でいるの？」

「心配で、つけてた・・・。／＼／」

空雅はぼそつと言った。

「（つけてた！？）」

私は空雅の後ろでそう思った。

「おい、こらあ！何こそこそ言っただ？おい！！」

高校生が怒鳴った。

「（どうしよう・・・もう駄目かもしれない・・・。）」

2人がそう思った。その時、

私たち3人は、校庭まで戻って来た。校庭にはウワサを聞きつけた野次馬でいっぱいだ。

「ここまでこれば大丈夫だろ……。」

伊吹はハアハア息を切らしながら言った。

「……あ、ありがとう。伊吹も空雅も……。」

私は改めて、2人に言った。

「いいよ。僕、結局何にもしてないし・・・。」

空雅は少しへこんで言った。

「そっだよ！危ねーじゃねーか！！無茶すんなー！！」

伊吹は空雅に向かって怒鳴った。

「だって・・・。」

空雅は少し涙目だ。

「・・・。。。」

伊吹はいきなり止まった。

「い、伊吹？」

私は伊吹に言った。伊吹は空雅に向かって、

「・・・シリウ・・・ス・・・？」

首をかしげながら言った。あまり自信はないようだ。

「へ・・・。？」

空雅は目を大きくして、伊吹を見つめた。

「シリウスか!？」

伊吹はだんだん笑顔になっていく。

「え・・・何でそれを・・・?」

空雅は混乱しているようだ。その内に、

「シリウスーーーー!!!!!!」

ガバツ!!

伊吹が空雅に抱きついた。

「ええええええええええ!!?」

私も空雅も驚いて、絶句してしまった。

伊吹は落ち着き、空雅から離れ、その場に座り込んだ。空雅はヘタツとなり、私はまだ口を空けたままだった。少しの沈黙が流れたが、それは伊吹によって壊された。

「探したんだぜー？シリウス！でも、何となく行動で分かったぞ！」

1人だけ元気だ。

「あ、あの．．．どちらさん．．．．？」

空雅は頭が痛そうだ。

「おーい！長い付き合いだろ！？ホントに分かんねえの！？」

伊吹は驚いているようだった。

「うゝん．．．。この人、どつかで会った気がするなあ．．．。」

空雅はもう少しで思い出しそうというように、足をバタバタさせていた。

「あははは！．．ホント、お前って面白い奴だよな。」

そんな空雅を見て、伊吹は笑いながら言った。

「あ．．．．！」

その言葉を聞いた空雅は小さく言った。そして、今度は大きな声で言った。

「オ、オリオン．．．？」

その瞬間、伊吹は目を丸くして

「分かったか・・・？」

と、ほとんど口パクで言った。空雅はうん、とうなずいて

「来てくれたの！？」

と、嬉しそうに言った。伊吹は思いつきり笑顔で、

「当ったり前だろ？」

と言い、コツツと空雅の頭を叩いた。

教室のみんなが驚いている。先生も呆然と見ていただけだ。

「いいのかな・・・、そろそろ戻らなくて・・・。」

私は教室の方を見て言った。

「いいんだよ・・・。あいつらもセンサーも、俺の前だと何にもできないんだから。」

伊吹はしれっとして言った。

「しかし、ここは何だあ？せつかく俺が戻って来たっていうのに、誰も出迎えてくれやしない・・・。」

「（それはあんたが怖いからだ・・・！！）」

空雅と私は心の中でそう思った。

「伊吹、どうしてみんな伊吹を怖がってるの？ここ来たの初めてでしょ？」

空雅は不思議そうに尋ねた。

「あゝ。俺さ、前に来たんだよ！修行で。2年間くらい。」

「そうだったの！？」

空雅は大きな声になってしまった。

「楽しいもんかと思ってたのによ、勉強なんかつまなくてな。もう嫌になったから、教室で暴れてみたんだ。そしたらそれが面白くて、やってるうちに“暴れん坊”とか“問題児”とか言われてたみたいだぜ？」

伊吹は楽しそうに話していた。

「伊吹と、空雅はどんな関係なの？」

私は2人を見ながら尋ねた。

「僕らは、親友とか、兄弟みたいな関係かな？いつも2人で一緒にいたからね！」

空雅も楽しそうに話した。

「そうそう、こいつ1人じゃ心配だからな！ロキがいなくなつて、こいつも地球に行つちまつて、俺は何もしないつてわけにはいかなえだろ？だから、こつやって来てやつたんだぜ？」

伊吹は得意げに話した。

「え．．．！？よく周りが許したね．．．。」

空雅はその事について驚いているようだ。

「んあ！？許すも何も、勝手に来たし！」

伊吹は当たり前のように言った。

「ええええええええええ！？」

空雅はまた叫んだ。

「大丈夫なの!？」

私も驚いて尋ねた。

「だって、言ったら絶対駄目って言うんだろ？ だったら聞くだけ無駄だって！！」

伊吹はニタツとして言った。

「いいいの？」

私は空雅に尋ねた。

「駄目駄目駄目……。伊吹なんてなおさらだよ！オリオン座は夏以外、毎日出てるんだから！！」

空雅は伊吹に少し怒って言った。

「まあ、帰ったら、ど叱られるけどな……。」

伊吹はケラケラ笑いながらそう言つと、

「でも、お前の方が大事だし。」

と、当たり前のように付け加えた。

「しょうがないな……。」

空雅はそう言いながらも、顔は少し嬉しそうに笑っているようだった。

「そつえば、伊吹さ。今までと全然キャラ違うじゃん！」

私は思い出したように言った。

「そりゃあ、作ってたもん。でも、こっちがホントだぞ？空雅の前だとちゃんと出せるんだ。」

「作ってたの〜！？」

私は怒ろうと思ったが、伊吹の笑顔を見て、私も笑ってしまった。

「・・・じゃあ、そろそろ行こっか！」

空雅の提案で、私たちは教室へ戻る事にした。

「お前、空雅が選んだ仲間なんだろう？」

伊吹が突然私に話しかけた。

「え？あ、そう・・・なのかな？」

私は自信なさそうに言った。それを見た空雅が、

「そっだよ！！」

と、大きな声で言った。

「じゃあ、俺は空雅と同じ奴を選んだわけか・・・。まあ、これからよろしくな！お2人さん！！」

伊吹は空雅と私の肩を叩いて言った。

「え！？」

空雅と私は同時に言って、同時に振り向いた。

「あ！言ってなかったっけ？俺、今日からお前らと、この学校通うから！あまりの頭の悪さに、“もう一度中学生からやり直してこい！！”だってさー！！」

伊吹は頭をかきながら笑っていった。

「聞いてない！！！」

空雅と私は、また同時につっこんだ。

「そういえば、どうしてお互いの事が分かったの・・・？」

私は席についた後、隣にいる空雅に話しかけた。

「初めて会った時と一緒にだったから・・・／／／」

「え？何って・・・？」

私は周りのざわつきで聞こえなかった。

「あゝ、長い付き合いだからだよ！／／／」

空雅は照れくさそうに、そう答えた――。

――最近ここに来た、オリオンって人。かなり乱暴らしいわよ？

女神たちが、集まって話していた。シリウスはそれを聞いたが、自分には関係ないと思っていたのだった。

――シリウス！かくれんぼしよ？

ロキがシリウスを引っ張って言った。

――よし！やろっか！

――シリウスが鬼ね！

と、ロキはあっという間にいなくなってしまった。

絶対見つけてやる！

シリウスも、そう言って走りだした。

宇宙は広い、そして、たくさん隠れる場所があった。星の後ろ。天の川の中……。

いないなあ……。

シリウスは困ってしまった。その時、

助けて！！

大きなクジラ（クジラ座）のそばで、ロキが叫んでいた。

あ！あのクジラは危ない！！

あのクジラは、何でも食べてしまうのだ。

早く助けないと！！

シリウスは何も考えず、とにかくロキを助けようと、クジラに向かって行った。そこを通りかかったのが、オリオンだった。オリオンはクジラに襲われているロキを見つけると、

危ない！

と、そこへ向かおうとした。しかし、先にシリウスがそこまで行っていたのだ。シリウスは、クジラとロキの間に入ると、手を大きく広げて、

——ロ、ロキに手を出すな！た、食べるなら僕を食べろ！！

恐怖で足がガクガク震えている。しかし、クジラはシリウスには目もくれず、大きな口を空けた。

——うわーーーー！！

・・・・・・・・・・・・・・・・。

急に辺りが静かになった。シリウスが恐る恐る目を開けてみると、前にはオリオンが立っていて、なんとクジラを矢で射止めていたのだ。

——おい・・・、大丈夫か？

オリオンは、そのままクジラを蹴り飛ばした。そして、シリウスの方を見て、

——無茶すんじゃないよ！！

と、怒鳴りつけた。

—— だつて……わあああああん。

空雅はオリオンが怖いのと、ホッとした安心感で、泣いてしまった。それを見たオリオンは、

—— お前つて、面白い奴だなあ……。

そう言つと、柔らかい笑顔で笑つた。

—— あ……。

それを見たシリウスも涙が止まり、つられて柔らかく笑つのだつた。

それからだろうか、2人は仲良くなり、周りの人たちを驚かせたのは言つまでもない——。

第3章・新しい仲間（後書き）

ありがとうございます^^

これから伊吹もどんどん登場していきますw

またよろしく願いします。

第4章・2人の秘密

外はもうすっかり秋になった。あれからというもの、私たちは周
りから変な目で見られるようになった。何というか、離れていくと
いう感覚だ。

「ねえ……。みんな絶対こっち見てるよね……。」

空雅は、小さな声で私に話しかけた。

「って言うかさ……。離れてってるよね……。」

私も、小さな声で空雅に言った。今は伊吹と空雅と私の3人で、廊
下を歩いている途中なのだ。みんな、廊下の壁に張り付いている。

「あれって、あの暴れん坊だよね……。」

「なんで、ここにいらんだろう……？」

空雅には周りの声がよく聞こえるようだ。

「どうしたの？空雅。頭痛い……。？」

私はこめかみを押さえている空雅に、心配そうに声をかけた。

「う、うん……。。」

空雅はあまり大丈夫じゃなさそうだ。どうしようかなと、思ってい

た時、突然肩がズシンと重くなった。

「こいつ、犬だろ？だから耳がいいんだ！だから、聞き無くない事もいちいち聞こえちゃうんだぜ？」

伊吹は、空雅と私の肩に腕を回して大きな声で言った。

「じゃ、じゃあ・・・何だよ、その大声は・・・。」

空雅は重そうに言った。

「あ！わりい、わりい。わざとじゃねえんだ。」

伊吹は空雅を離して言った。

「絶対わざとだろ！！」

空雅は少し怒っているみたいだ。

「俺の声は、お年寄りにも聞こえやすくなっております！！」

伊吹はケラケラ笑いながら大声で言った。

「周りがクスクス笑ってるんですけど・・・。」

私は呆れたように、伊吹に言った。

「・・・おい！！いつまで腕回してるんだよ！か、楓に！！！！」

空雅はさっきより怒って怒鳴った。

「んあ！？／／／」

伊吹は今気づいたらしい。いきなり私を突き飛ばして言った。

「な、何でもっと早く言わねえんだ！！こ、これじゃあ・・・／／」

伊吹はいきなり言葉に詰った。空雅は、

「“これじゃあ”・・・？これじゃあ何だよ。」

と、伊吹をにらんで言った。伊吹は「ん。」と言ったかと思うと、

「・・・き、菌がうつる！！」

と、制服をパタパタはたきながら言った。

「はあ！？」

と、空雅は怒っていたが、少し笑って言った。

「あんた、ほんとに2個上！？同い年にしか見えない・・・。」

私は呆れて言った。

「親しみやすいキャラなんだよ。俺・・・。」

伊吹は自慢げに言った。

「子供っぽいだけじゃん……。」

私は小さな声で言った。

「僕もそう思う。」

空雅も冷たく言った。

「お前！まだ“僕”だったのか！？」

いきなり伊吹が身を乗り出して言った。そのまま、

「男なら男らしく、“俺”って呼べよ！！」

と、大声で言った。

「そんな事、空雅の自由でしょ？」

伊吹は私の意見も聞かず、

「お前はもっと男らしくなるべきだ！！俺様みたいに。」

と、決めつけた。

「え……。空雅があんたみたいになるのは絶対嫌だよ……。」

「なんだよてめえ！！口はさむな！！！」

と、私と伊吹がにらみ合っていると、

「まあまあ……。僕は僕なんだし……。」

空雅は2人をなだめるように言った。

「お前もお前だ！女の名前も呼べないくせに！！」

伊吹は元々大きい声が、さらに大きくなっていた。

「な、何もそこまで言う事ないじゃないか……。！！／／／」

空雅も周りの声が聞こえないくらい、大きな声で言った。

「こらーーーー！！お前ら！！今何の時間だと思ってるんだ！！」

大貫先生の声だ。ふと、周りを見ると、廊下には私たち3人の他に誰もいなく、さらにすべての教室のドアから生徒が顔をのぞかせていた。

「……ふん！！」

伊吹と空雅はそう言うと、それぞれの教室に入ってしまった。伊吹のクラスからは、ドアを蹴り飛ばす音が聞こえた。

「何か嬉しい事でもあったんですか？」

「ああ。その内お前らにも分かるからさ……。」

そうか、先生はこれと言ってたんだな。伊吹が自分のクラスじゃないから喜んでたのか。私はここでそれを思い出したのだった。

あの後から、2人はなかなか口を聞かなかった。しかし、帰りに私が日直の仕事をし、待っていてくれる2人の所に戻った頃には、すでに仲直りしていたのであった。

「何だよそれ！それはねえって〜！」

伊吹はすっかりご機嫌な様子だ。

「空雅、伊吹に何したの・・・？」

私は空雅を離れた所まで引つ張って尋ねた。

「あゝ、アイスおごったんだよ。」

空雅は少し笑って答えた。

「え！？何で？」

私は驚いて言った。

「何でって、いつまでもケンカしてるわけにはいかないし・・・。」

空雅は慣れているような口調で言った。

「そ、そうだよね・・・!」

私は、伊吹の扱いに慣れている空雅に驚いたと同時に、アイスをおごってもらったくらいで怒りがおさまる伊吹にも驚いた。そして、伊吹は本当に子供だなと思ったのだった。

その帰り道、空雅が突然話し始めた。

「ねえ、ロキ探しの方なんだけどき。僕、気になってる人がいて・・・。」

伊吹は“僕”の所で少し反応したのだが、アイスを買ってもらったので何も言えないようだ。

「え？誰・・・？」

私はそんな子いたつけ、と思いながらも気になって尋ねた。

「あゝ、水瀬さん。僕と一緒に転校してきた人だよ。」

「あゝ。あの静かな奴だな!」

伊吹は人差し指を突きつけて言った。

「そうそう!」

「え!?!でも、小春は女の子だよ?」

私は首をかしげて言った。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

2人共黙ってしまい、少しの間沈黙が流れた。しかし、それは空雅の笑い声によって破られた。

「あははは!!そっか、か・・楓には言っ てなかったね・・!」

その後に伊吹が顔を近づけて言った。

「はあ!?!誰がロキが男だって言っ たんだよ。ロキは女だ、お・んな!!!」

私は、知らないうちにロキは男だと思い込んでいたようだ。

「そうだったの!!?!私てつきり・・//」

「ばっかだな。お前、そんな事も分かってなきゃ、見つかるもんも、見つかんねえぞ。」

伊吹は少し笑って言った。

「でも、どうして？小春は家族と暮らしてるのに？」

「それはね、僕たちが人間の記憶を操ることができるからなんだ・・・」

「少しだけだけどな。滅多にやらないんだ・・。」

だんだん分かってきた。たしかに、小春でもおかしくない。

私たちはこれからどうしたらいいのか考えた。

「ロキって何か特徴とか無いの・・？」

私は2人に尋ねた。

「とくちよーか・・・。そんなのあったか？アイツに・・。」

伊吹は考え込んでいる空雅に、話をふった。

「・・・イヤリング。」

「え！？・・・何だって？」

「イヤリング！ロキはいつも、小さな白いイヤリングをしてた！！」

空雅は少し嬉しそうに、大きな声で言った。

「おお、じゃあ、そのイヤリングを付けてたら、ロキってわけだ！」

「！」

伊吹も嬉しそうに言った。

「でも、学校にそんなの付けてたら、大貫にばれてるんじゃない？」

私は少し考えてから言った。

「いや？俺は堂々と付けてるぜ？」

伊吹は右腕をまくって、手首に付いている赤い玉のブレスレットを見せた。

「あんたは、いいのよ。問題児なんだから・・・。」

私は伊吹の肩にポンと手を置いて言った。

「んあ！？何だよそれ、元問題児だろーが！それに、空雅だって付けてらあー！」

伊吹はぶっきらぼうに答えた。そして、空雅の首もとをゴソゴソし始めた。

「おい！止めるー！くすぐりたいー！」

空雅は顔が真っ赤だ。伊吹はそんな事もお構いなく、まだゴソゴソしている。

「あつたー！」

伊吹は、空雅の首にかけられている、透き通った青白いペンダントを取り出した。

「え？空雅も付けてたの！？」

私は驚いた。だって空雅は、優等生な感じがしていたから。

「俺たちの仲間は、みんな付けてるんだ。」

「だからもちろん、ちゃんとした意味もあるんだよ。」

2人は得意げに話し始めた。

「僕たちは星座って言ったよね？だから、星の集まりで出来ているんだ。」

「で、お前も聞いた事あんだろ？星の名前！」

「うん。アンタレスとか、スピカとか？」

と、私は思い出して答えた。

「そうそう。そうやって、みんなが知っているような星はたいいてい大きな星なんだよ。」

空雅がニコツと言う。

「だから、こいつだってそうだろ？“シリウス”って名前は犬座の中の星の名前なんだ。」

「“シリウス”は、1／5等星のなかで1番明るいつて言われてるんだよ？」

空雅は自慢げに言った。

「で！俺たち星座は、自分にある星の中で代表になる星を、体のどつかに付けてるんだ。」

伊吹は右腕を、空雅は首もとを指差した。

「どこかって言っても、結局その星がある位置になんだけどね・・・」

「

空雅は小さく笑って言った。

「僕は丁度、首の位置にシリウスがあつたんだ。」

空雅はニコニコしている。

「そうじゃない奴だって、もちろんいるぜ？」

伊吹は急いで、そう付け足した。私は2人の話を聞いて、

「じゃあ、ロキはそのイヤリングが星つて事？」

「そう！」

「そーだ！」

2人は同時に身を乗り出して言った。

その後、私は少し考えてから

「じゃあ、どうやって調べるの？学校には付けてないみたいだし・・。
」

と、話を戻した。

「こつそり調べるしかないじゃん！ロキは用心深いからな！！」

伊吹は元気に言った。

「こつそり？どうするのさ？」

空雅は伊吹に向かって言った。

「忍び込む！！家と学校に！！」

伊吹は力をこめて言った。

「ええええ！？いいの？そんな事して。しかも、絶対見つかったやうでしょ？」

私は驚いてよろめいた。

「家は知らねえけど、学校なら見つかんねえって！！俺、前もやった事あるし。」

伊吹はニヤニヤして言った。何だか、すごい悪人みたいだ・・・。

「そうだね・・・でも、家はどうするつもり？」

空雅は冷静だ。私は伊吹の言葉よりも、空雅の態度に驚いた。絶対慣れてる・・・！

「簡単だよ、窓からのぞけばいいんだし！」

伊吹はサラッと答えた。

「ああ。そうだったね！！」

空雅も手をポンツと鳴らして言った。私は2人が何を言っているのか、だんだん分からなくなってきた。

「おい・・・分かって聞いているか？」

伊吹は、分かっただけらしい。私が全然分かっていない事が・・・。

「んとね、ロキのイヤリングも、僕のペンダントも、伊吹のブレスレットも。夜になったら光るんだ。」

と、空雅は私に分かりやすく説明してくれた。

「あー。だから分かるんだね！窓から見れば。」

私は理解できたのが嬉しくて、明るく言った。

私たちは一度家に帰り、そしてもう一度踏み切りの前で待ち合わせした。私は少し早く来てしまったみたいだ。近くのバス停のベンチに座って待つ事にした。時計はもう8時を回っている。辺りももう暗くなっていた。

「おーい……。」

「あ！来たみたい。」

遠くから聞こえる声に、私は素早く反応した。

「お前、はえーよ……。」

伊吹だった。走ってここまで来たらしく、ゼーゼー言っている。

「そんなに走って来なくても、空雅がまだなのに……。」

私は、「座りなよ。」と最後に付け足して言った。

「んあ！？あいつ、まだ来てなかったのか……。」

伊吹は疲れて怒る気にもなれないらしい。そこへ、少し遅れて空雅がやってきた。

「ごめん、ごめん・・・。」

「お前が遅いなんて珍しいな。」

伊吹は空雅にそう言った。

「え？そうなの？」

私は初耳だ。でも、空雅が時間に遅れないのは何となく分かる。

「こいつは犬だから、足がめちゃくちゃ速いんだぜ！」

伊吹は自分の事のように、自慢げに言った。

「お前が自慢するな・・・。」

空雅は静かにつつこんだ。

私たちはそうやってワイワイしながら、学校の校門前までやって来た。しかし、ここからは静かに行動しなければならない。

「じゃあ、行くよ？」

「うん・・・でも、夜の学校って怖いね・・・。」

私はおびえながら言った。

「こんな事で怖がんなよ！」

伊吹は、私の頭をコツンと叩いて言った。私はムツとしたが、それ

よりもやっぱり怖いので、止めておいた。それにしても、落ち葉の
を踏んだ時の音で、いちいちビクビクしている伊吹を見るのは、実
に面白い。

「職員室は明るいよな。やっぱり先生がいるみたいだな・・・」

「でも、ばれるとやばいから。早く済ませよ!」

伊吹と空雅の声が聞こえるのだが、どこにいるのかあまりはつきり
分からなくなってきた。

校舎の前までやってきた。

「どこから入るの? 玄関はカギがかかってるよ?」

私は、辺りを見回しながら小さな声で言った。

「あ・・・」

「あー・・・」

2人は同時に言ったようだ。そこから、何の声も聞こえなくなっ
てしまった。

「ちょ、ちょっと! 急に黙らないで・・・怖いって・・・」

私はあたふたして言った。

「困ったなあ・・・。どうか、開いてる所ないのかな・・・?」

空雅はそう言うと、その場に座り込んでしまった。

「日直とかが、カギ閉め忘れてたらいんだけどね……。」「

私もそう言っつて、座り込んだ。

「そんなドジ、いるわけねえだろ……。」「

伊吹もそう言っつて、座り込んだ。

「分かんないよ？今日の日直誰だったっけ？」「

空雅がふざけて言っつた。

「んゝ・そんな事いちいち把握してねえからなー。」「

伊吹も適当に返事を返していた。

「あ……。」「

私は小さな声を発した。

「おい！どうしたー？」「

「どうしたの？」「

私の声に、2人が反応する。

「私だ……。！」「

「え？何が？」

「何がだよ！！」

2人は何の事だか分からないようだ。

「日直！私、今日日直だった！！」

私は自分でも驚いて言った。

「あー！！そうだ、だからお前今日遅かったんじゃない！！」

伊吹はつい、いつもの大声になってしまった。

「や、止めろっ！！」

空雅は伊吹の口を素早くふさいだ。

「モゴモゴ……。ぷはっ……。わりい、わりい……。」

伊吹は申し訳なさそうに言った。

「危ないって……。」

空雅は冷や汗でびっしょりだ。

ザワザワザワ

いきなり強い風が吹いたので、私は顔を伏せてしまった。枯れ葉が辺りを舞っている。

風が収まり、顔を上げた私は、目の前の現実を見て言葉を失った――。

私の目の前に立っていたのは、一匹の大きな犬と、立派な青年だった。

「え？ええ？どーいうこと!？」

私は目の前の状況が、なかなか飲み込めなかった。

「あー……。。」

「うわ!?!犬がしゃべった!！」

私は、とうとう幽霊が出たんだと思った。

ダッ

私はそう思うと、校門に向かって走り出した。全速力で。

「はぁ、はぁ、はぁ……。こ、ここまでこれば……。」「

「楓！」

「うわぁー！ー！ー！来ないで、来ないでー！ー！ー！」

ダダダダダッ

「おい！」

「……。おい！ー！楓！ー！ー！」

誰かが私を呼んでいる。

「……。……。」。」「

私は怖くて、声が出なかった。

「楓！！俺だ！伊吹だよ！！！」

「・・・え！？」

ドンッ！！！！

「・・・・・・・・・・ってえなあー！！」

「・・・・・・・・・・いててて・・・」

私は、伊吹（らしき人）とぶつかってしまったらしい。

「て、てめー・・・いきなり止まんじゃねーよ！！！！！」

伊吹（らしき人）は私に向かって怒鳴りつけた。

「・・・ホントに伊吹？」

私は恐る恐る、その伊吹（らしき人）に尋ねた。

「俺じゃなかったら誰なんだよ・・・。ちなみに、あの犬も空雅だぜ？」

「・・・・・・・・？」

私が「？」という顔をしているので、伊吹は「空雅ー！」と呼んだ。空雅はかなり遠くにいたはずなのに、あっという間にやってきた。

「か、楓……。ごめん！言ってなかったね……。」

空雅（らしき犬）は申し訳なさそうに、頭を下げた。

「どついつ事……。!?」

私は空雅（らしき犬）と伊吹（らしき人）を見ながら言った。

「見ての通りだよ！元に戻ったんだ！！」

「元……。?」

私は首をかしげて言った。

「だーかーらー！！俺たち星座は、夜になると元の姿に戻っちゃうんだよ！！」

「……。ええええええええ！?」

私はやっと理解する事ができ、そして絶句した。

空雅と伊吹が、詳しく教えてくれた。

「……。だから、僕は犬座で犬。伊吹はオリオン座でオ

リオン。」

「10時になったら、みんなこうなっちまうんだ・・・。」

「・・・大変だね。」

私はそう言うしかなかった。

「大変つてもんじゃねえって！！夜は外にも行けねえんだぞ！！」

オリオンは自分の体を見ながら、困ったように言った。

「僕はそんなに苦でもないけど・・・？」

シリウスは後ろ足で耳をかきながら、平気な顔して言った。

「お前は犬だからだろ・・・。」

オリオンはため息をついて言った。

「じゃあ、ロキも・・・？」

私は2人に尋ねた。

「そりゃそうだろ。ロキも仲間だからな・・・。」

「ロキは子犬座だから、子犬に戻るんだよ。」

オリオンとシリウスはうまく説明した。

「これからどうするの?」

私は学校（ずいぶん離れてしまったが・・・）の方を見て尋ねた。

「行くしかない・・・よね。」

シリウスは苦笑いをしながら言った。

「じゃあ、チャチャツと終わらせようぜ?」

オリオンはそう言って、また学校に向かって歩き始めた。

窓を確認してみた。私もすっかり閉めたという自信がないので、一緒に開いている窓を探した。私たちの教室は2階なので、上をひたすら探す。丁度、首が疲れてきた所でシリウスが言った。

「あつた!カギ、かかってないよ!」

「よし!」

オリオンが言った。

「どうやってあそこまで行くつもり?」

私はオリオンに尋ねた。

「んゝそうだな・・・。」

オリオンは少しの間、考え込んだかと思うと、いきなり手をポンツと叩いて言った。

「しゃーねえな……。よし、俺の体につかまれ！2人とも！！」

「え？」

私の顔はまたもや「？」だった。

私とシリウスはオリオンの両肩につかまった。いや、乗ったと言った方が正しいかもしれない。

「いくぞ！ぜってー離すなよ！！」

オリオンは、シリウスと私をポンポン叩いて言った。そして、そのまま校舎の壁をよじ登り始めた。私は時々“すごい、すごい”と言いながら、オリオンを見て、そして周りを見た。オリオンは、私たちなど軽がると持ち上げてしまうほどの力持ちだった。

「あつという間に2階の窓だ。やっぱりオリオンはすごいな。」

シリウスはオリオンに顔をすり寄せながら言った。

「じゃあ、シリウス！入れよ。」

「うん！」

シリウスは器用に前足で窓を開けると、そのままスルツと教室に入って行った。

「お前も入れ！」

オリオンは私の背中を少し押して言った。

「ありがとう！」

私はお礼を言うと、シリウスに続いて教室に入って行った。その後
にオリオンも入って来た。

「え〜っと、小春の席は・っ！あ、あつたよ！」

私は小春の席を見つけると、2人に声をかけた。

「中にあるか？」

オリオンはこちらに向かいながら尋ねた。

「ん〜、うん。何にもないよ？」

私は机の中をゴソゴソしながら答えた。

「そっか……。ここにはないのか〜。」

オリオンは、近くにある机の椅子に座り込んだ。

「でも、窓開いててホントに良かったね。」

シリウスもこちらに向かいながら、笑顔で言った。

「う、うん！」

私も笑顔でそう返した。開いていて良かったと思ったからだ。しかしそれと同時に、私が本当にドジだということが分かってしまったので、なんだか複雑な気持ちになった。

ドサッ

「ん!？」

私の近くで、何かが倒れる音がした。

「お、おい!シリウス!？」

なんと、オリオンの視線の先には、シリウスが倒れていたのだ。

「シリウス!？シリウス!！」

私はシリウスの体を揺すって、名前を呼びかけた。

「あ．．．。」

私は手を止めた。オリオンはそんな私を見て、

「楓．．?」

「熱い．．。オリオン、熱いよ!」

「まじで！？熱かよ・・・。」

シリウスは熱を出してしまったらしい。

「そういえば、ここに来る時から、何かおかしかったかも・・・。」

「あー。そういえばそうだな・・・。何だか静かだったな・・・。」

「早く帰らないと!!」

私はそう言ってシリウスを持ち上げようとした。

「待て！動かさない方がいい・・・。」

オリオンは私の手を止めて言った。

「でも・・・。」

「どうせ医者にも連れて行けねえんだ。途中で戻ったら大変だからな！だったら下手に動かさない方がいい。」

オリオンは珍しく真剣になって言った。

「ここで待ってろ。今から薬持って来てやつから!!」

「うん。」

そう言っ、オリオンは窓から外に出て行った。教室の中は、熱に苦しむシリウスと、それを見ている私だけになった。

「・・・もっと早く気づいていたら、こんな事にならなかったのにね。」

私は、シリウスの頭をなでながら言った。

「気づかなくてごめんね・・・。」

20分くらい待ったところで、やっとオリオンが帰って来た。

「よし、これは効くぞ。」

オリオンが手渡した薬を、水と一緒にシリウスに飲ませた。だんだん効いてきたみたいだ。

「良かった。少し治まったみたい・・・。」

私がホッとしていると、

「じゃあ、帰つか!!」

オリオンは明るく言った。そう言うと、オリオンはシリウスに毛布を巻きつけた。

「外は寒いからな・・・。」

オリオンは、シリウスを抱き上げると、窓に座った。そして、右腕のペンダントが少し光ったかと思うと、次の瞬間には窓の外で空中に浮かんでいた。

「えええええ！？」

私は、驚いて窓に身を乗り出した。

「ほれ！来いよ！！」

オリオンは私に右手を差し出した。私はまた「？」の顔をしたまま、わけも分らず差し出された手につかまった。その瞬間、私の体はフワッと浮かび、空中を漂っているのだった。

「すごい！こんな事もできるんだ！！」

「当たったり前だろ？俺たちを何だと思ってるんだよ。」

オリオンは、得意げに言った。

そのまま上に上がり、町を空から見下ろした。そして、家の方に向かって進んで行った。

「あ．．れ．．．？」

私はフツと思い出した。この光景は．．．？どこかで見たことがある気がする。あれは、芽衣の家に泊まった夜に見た夢そのものだった。

——風の涼しい、きれいな三日月の夜。私は誰かに手を引かれ、自分の町の上空を飛んでいる。・・・誰かに手を引かれ。しかし、それが誰なのか、私にはすぐに分かった。・・・

“オリオンだ”——

「・・・おい！おい！！聞いてつか？何ぼーっとしてるんだよ
」！」

オリオンの声だ。

「え？あ、ああ・・・ごめん、ごめん・・・。」

「お前も熱とかないだろうな・・・。」

「ないって！！」

私はバシッとつつこんだ。

「さっきこれ使えば良かったのに・・・。」

私はオリオンに嫌味っぽく言った。

「あ、あんなところで力使う事ねえって思ったんだよ！！／／／」

オリオンはぶっきらぼうに言った。

「忘れてたんでしょ？」

私はニヤツとして言った。

「うつせえ！！／／／」

オリオンはプイツと顔を背けた。

「・・・あはは・・・」

シリウスは弱く笑った。

「あ、シリウス起きたんだ・・・」

私は優しく言った。

「何だよ。さつきと全然態度違うじゃねーか・・・／／／」

オリオンはいじけて言った。

「ねえ、シリウスってどこに住んでるの？」

私は話を変えて、オリオンに尋ねた。

「あゝ。それが言いにくいんだけど・・・。」

オリオンが言葉を詰らせている。

「え、何?どいどい?」

「それが、お前ん家の屋根の上なんだ……。」

「ええええええええ！？」

私は声を上げながら、今日はつくづく絶句が多いなと思った。

「こいつには家がねえんだ・・。」

オリオンは、抱いているシリウスを見ながら言った。

「知らなかった・・・。そんなに近くにいたなんて・・・。」

私は驚いて、あまり声が出なかった。までよ……。じゃあオリオンは……？

「まさか、あんたも……？」

恐る恐る、私はオリオンに尋ねた。

「ち、ちっげーよ！俺は前にもここに來た事があるんだから、家ぐらいもってら！」

オリオンはムキになっていたので、隣でホッしていた私には気づかなかった。

シリウスの家（正確には私の家）まで来ると、ゆっくり降りて、シリウスを降ろした。

「お前、そこでシリウス見てろ！俺は、水瀬の家の方見てきてやるから。」

「あゝ。ありがとね！」

「じゃあ、頼むぞ！」

そう言い残すと、オリオンはスイツと空に消えて行った。

「シリウス・・・早く元気になるんだよ？」

私はまた、シリウスの頭をなでながら話しかけた。

「珍しく、あのオリオンも優しいんだか・・・ら・・・。。。」

少したって、オリオンが帰って来た。

「・・・あれ？誰も俺の事待っててくれてないし・・・。」

オリオンは、すっかり眠っているシリウスと私に向かってつぶやいた。

「しゃーねえな・・・。」

そう言いながら、柔らかな笑顔で笑うのであった。

第4章・2人の秘密（後書き）

とうとう2人が本当の姿を現しましたw
これから口キ探し、どうなるんでしょう・・・。

第5章・スキー研修

朝になると、私はちゃんと自分の部屋で、自分のベッドで眠っていた。

「あれ・・・？」

疑問に思いながらも、ささっと準備をして学校に向かった。

「おはよー！」

学校には、もうほとんどの生徒が来ていた。

私は菜樹に言った。

「おー楓、おはよー！！！」

菜樹を見て気づいた。もう冬服だ。

「だんだん寒くなってきたもんね。」

菜樹はそう言っで、外を見ている。

「私も、明日から冬服にしてこよ！」

私はそんな独り言を言っだ。

伊吹が教室に入ってきた。もちろん、空雅と一緒に。

「あ！空雅！！もう大丈夫なの？」

「うん！あの薬、いつもよく効くんだ。あと、か、楓の看病もあつたし！ありがとね！！」

「あはは、私は何にもしてないし……。伊吹がほとんどだよ！」

私は伊吹の制服を引っ張りながら言っだ。

「な、何でもねーっで……。／＼／」

伊吹は照れているようだ。私は昨日の事を思い出して、

「で、あつたの？小春の家の方には……。？」

と、尋ねた。

「それが、無かつたんだよね。」

伊吹は困ったように答えた。

「じゃあ、今度友達と出かけるから、その時に小春も誘っってみるよ

！普段なら、つけてくるでしょ？」

私は明るく言った。

「・・・・・・それ、もっと早く言ってくれない？」

伊吹は苦笑いで言った。

冷たい北風が吹くようになり、辺りが冬の雰囲気になってきた頃。
スキー研修の話が出てきた。

「・・・・という事で、もうすぐスキー研修があるから、しっかり準備しておけよ！！」

と、大貫先生はニコニコして私たちに言った。

「スキーってなあ・・・・。」

伊吹はやる気のない顔をしている。

「まあまあ、せっかくなんだし・・・・。楽しもうよ！」

空雅は楽しみなようだ。

「って！何であんたがここの教室にいるの！？」

私は驚いて、少し怒って言った。

「だって、勝手に出てきても何にも言われないんだもん……。」

伊吹はうつむいて、シュンとして言った。

「何でもあるね……あなた。」

「!？」

このもの静かな声は、小春のものだ。

「こ、小春……。いきなりでびっくりしたよ……。」

私は椅子に座り込んで言った。

「驚くも何も……隣のクラスじゃない……。」

小春はそう言うと、私の隣（空雅の席）に座った。

「（だから驚いてるんだよっ!）」

みんなが思った。

「それにしても、ここはまだ雪降らないね。」

私は外を眺めながら言った。私の席は窓側なのだ。

「スキーなんてできるのかな……?」

空雅も、外を眺めて言った。

「なあ、スキーって雪がないとできねーのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

伊吹の言葉のせいで、私たちの会話はピタツと止まった。

「・・・・伊吹？伊吹はスキーを知ってるよね？」

「知らねーよ？」

伊吹は当然だとも言うように、答えた。

「なんで、空雅は知ってるの？」

私は空雅に尋ねた。

「だって、勉強したもん。人間じゃないってばれないように。」

空雅も当然だとも言うように、答えた。

「この2人の違いは一体何・・・？」

私はぼそつと独り言を言った。

「・・・何を話してるの・・・？」

「うわ!？」

小春が私のすぐ隣で言った。私は驚いて立ち上がってしまった。

「（そっか、いたんだ・・・。）」

「で、何の話・・・？」

小春は少し笑って言った。

「ん？いやいや、何でもないよ！伊吹のあまりの知識の無さに、空雅と呆れてたの・・・。」

私は慌ててごまかした。

「ふうん・・・。」

小春はそう言うと、自分の教室に戻って行った。

「はあ。」

私はホッとして、また座り込んだ。こうやって、ずっとごまかし切れるのかな・・・。

明日が研修だ。その帰り道、今日は久しぶりに隼と菜樹と芽衣と一緒に帰った。もちろん、空雅と伊吹も一緒だ。

「スキー研修楽しみだな!!」

隼ははしゃいで言った。

「何、遠足行く小学生みたいに言ってるのよ。」

芽衣は笑いながら、隼に言った。

「結構早い時間に集合だよな・・・。」

菜樹は私に話しかけた。

「うん。あ！菜樹大丈夫？私、呼びに行こうか？」

私は心配になった。

「それは助かるな・・・。」

菜樹はホッとして言った。

「おい！」

「ん？」

伊吹は空雅に話しかけた。

「お前、ウチに来い！」

「え？なんで？」

空雅は何のことだか分からないようだ。

「だーから！寒いだろ？前みたいに熱出されたら大変なんだよ、俺が！！／／／」

伊吹は少し赤くなって言った。

「・・・うん、じゃあ、そうさせてもらっよう！」

空雅はニコニコして言った。

「な、何笑ってんだよ！気持悪い・・・／／／」

「ごめん、ごめん・・・」

やっぱり空雅は笑っていた。

みんなに手を振って、私は踏み切りの向こう側に渡った。明日のことではいつぱいの頭で、家に帰ってきた。

「ただいま。」

私は少し大きな声で言うようになってきた。そして、返事を聞く余裕も出てきたところだ。階段を上り、部屋のドアを開けた。

「うつわ！」

私の部屋は、明日の準備のおかげでかなり散らかっていた。

「我ながら・・・汚い・・・。」

私はそんな独り言を言いながら、近くに置いてある旅行かばんを廊下に出した。

「この部屋も片付けておこうか・・・。」

ベッドの上に置いてある服、机の上に散らばっている教科書・・・。黙々と片付けていたら、あっという間に夕飯の時間だった。お腹がすいたので、下に下りてリビングに入って行った。

「あら、楓。明日は研修なんですよ？」

母は私に背中を向けたまま、尋ねてきた。

「・・・うん。」

私はご飯を口に入れたまま、返事をした。私はご飯を食べながら、研修先のご飯はどんなのかなと、考えていた。

「お！楓いたのか！」

父はお風呂から出てきたらしい、頭を拭きながらやってきた。

「いたよ。」

私は食べ終わった食器を片付けながら、顔は無表情で返事をした。

夕飯はあつという間に終わり、お風呂にも入り、歯も磨いたので、自分の部屋に戻ることにした。

「今日は早く寝よう！」

私は階段を上りながら、独り言を言った。

「あ．．．楓。」

琴音が階段を下りてきた。そういえば、あの日からずっとまともにしゃべってない気がする。2人は足を止めて、

「．．．もう寝るの？」

琴音は作り笑いをしているようだった。

「うん．．．。」

私は、めんどくさそうに返事をした。

「そっか、気をつけてね．．．。」

琴音は何だか、沈んでいるようだった。2人の止まっていた足は、再び動き出した。

「・・・・・・・・・琴音？」

「・・・・・・・・え？」

なぜか、私は琴音を呼び止めた。琴音は驚いて、振り向いた。

「・・・・・・・・お土産買ってきてあげる！」

私は笑顔で言った。琴音の顔はパくつと明るくなった。

「・・・・・・・・うん!!」

そして、無邪気に笑いかけてくれた。私も嬉しくなつて、そのままの気分で布団に入って、眠りについたのであった。

ジリリリリリリリリ

「朝・・・？」

良かった、ちゃんと起きることができて。

私は旅行かばんを持って階段を下りて、朝食を食べた。そして、かばんが重いので、少し早めに家を出ることにした。

「お土産ちゃんと買ってきてね。」

琴音が玄関まで来て言った。

「オッケー!!」

私はニタツとして答えた。

「気をつけるのよ、楓。」

母も玄関まで来てくれた。

「・・・!？」

私は驚いた。母がそんな事を言ってくれるとは思わなかったからだ。

「……うん！」

それでも私は嬉しくて、それを隠すことができなかった。

「遭難しないでよ？」

琴音が笑いながら言った。

「当たり前じゃん！大丈夫！！」

私はそう言つと、かばんを肩にかけた。

「いつてらっしゃい！」

母と琴音がそろって言った。

「いつてきまーす！」

私も元気に返すことができた――。

集合の学校の正面玄関前。

「おっせーなー。」

伊吹は空雅と一緒にいた。空雅・菜樹・隼・小春・芽衣・私は同じ班だった。班は学年で自由に決める事が出来たので小春と芽衣と伊吹も一緒になる事が出来る。本当は空雅が班長だったのだが、自分が1番年上(2つ上)だというプライドから、伊吹が自分で班長をやろうと思ったらしい。だから、こうして他の班員を待っているということだ。

「あと、菜樹さんと隼と小春さんと芽衣さんと・・・か、楓だね・・・」

「なあ、その“か、楓”って直んないのか？」

「・・・むっり・・・／＼／」

空雅はふざけて言った。

「まーいいけどさ・・・で？あと誰なんだよ！」

「菜樹さんと隼と小春さんと芽衣さんと・・・か、楓だよ？」

空雅の言葉を聞いて、伊吹は少し考えていた。

「んあ！？それって、俺たち以外の奴全員じゃねーか！！」

伊吹はいきなり大きな声で叫んだ。

「そうなんだよ、何なんだこの班……。」

空雅は呆れて言った。

「おい！」

「あ！来た、来た！！」

空雅は声のする方に手を振った。走ってきたのは隼だ。

「ごめん、ごめん……。でも、まだみんな来てないんだな……。」

隼は最後じゃなくてホッとしているようだ。

「うわ！？」

ドサッ

突然声が聞こえたかと思うと、空雅が倒れこんできた。

「どうした？」

隼が声をかけた。すると突然、隣から

「あら、ごめんなさい・・・。」

「・・・ひっ!!」

隼も驚き、しりもちをついてしまった。

「な〜んだ。小春じゃねーか。」

伊吹がケラケラ笑って言った。

「で、でもいきなり後ろはないよ・・・。」

空雅は体に乗っかっている隼を退かしながら、小春に言った。

「・・・貴方たち早いわね・・・。」

小春は静かに言った。

「（シカト!?!）」

「・・・てめー今何時だと思って・・・!!」

伊吹が大声を出そうとした、丁度その時、

「ごーめーん!遅れた!!」

私と芽衣が菜樹を引っ張って、ここまで走って来た。

「悪い……。朝は苦手なんだ……。」

菜樹は私に「ありがと……。」「と言うと、伊吹のところまで行って。

「班長サン、ご苦労様……。」

と、肩をポンポン叩いた。

「がー！！！お前らああ……。！！！」

「全員集まった班の班長は、言いに来いよー！」

伊吹の声は、見事に先生の声でかき消されてしまった。

「ちつ……。！！。」

「楓？何かご機嫌だね！」

芽衣はニコニコしている私に尋ねた。

「え？へへへ、ちょっとね。」

私は鼻歌を歌っている。

「何があつたの？」

空雅もつられてニコニコして尋ねてきた。

「んゝ。家族が少し元に戻ったの！空雅に初めて会った日に大ゲンカしててね、ずっとまともに口もきかなかったのに、今日は“いってきます”が言えたの！！」

私は嬉しくて、手をいっぱい動かして話した。

「そっか！良かったね！！」

空雅も笑顔で返してくれたので、私はもっと嬉しくなった。

「あ、空雅！」

「ん？何？」

空雅が言った。

「あのさ、小春の事なんだけど・・・。」

私はヒソヒソ言った。

「ああ、どうだった？どっか一緒に出かけたんでしょ？」

「・・・やっぱりイヤリングなんか付けてなかったよ？」

「そっか・・・。じゃあ、あの人じゃないんだね。」

空雅は軽くため息をついて言った。

「そうだね。また探さないかね。」

私は苦笑いで言った。

「お前らー！バス乗れってー！！」

伊吹の声が聞こえてきた。

「行こ？空雅。」

「あ、うん！」

私たちは早速バスに乗り込んだ。

これから5日間の研修が始まる――。

2時間ぐらい乗っただろうか、周りが雪山になってきた。それまでワイワイ騒がしくなっていたバスの中は、急に静まり、みんなは

大貫先生の話に耳を傾けた。

「すっかり言い忘れていたが、この近くの学校の生徒も丁度同じ日にここに来ているんだ。だから、こっちの学校の班に1人ずつ向この学校の生徒が入るからな。仲良くやれよ！あと、ここは雪崩がくると非常に危険だから――」

みんな後の話は聞いていない。

「おいおいおい……。聞いてないぞ！すっかり忘れてたで済むのによ……。」

伊吹は頭を抱えている。

「そんなに深刻？班員が1人増えたくらいで何も変わらないと思うけど……。？」

私は、悩んでいる伊吹に声をかけた。

「……………それもそうか！」

「切り替え早っ！！」

私は素早くつつこんだ。

そんな感じで、私たちはスキー場の近くにある、ホテルに到着した。

「同じ班の人と同じ部屋だから、1班から順番に入ってけい。」

大貫先生の声が聞こえてきた。

「・・・！？」

その声に隼が反応した。

「・・・男女別だぞ。」

先生はニヤリと付け加えた。

「ちえ・・・。」

ドカツ

「当たり前だ！！」

伊吹は隼の頭を殴って言った。

「・・・じゃあ、私は芽衣と菜樹と小春だね！」

私は3人を連れて、部屋まで行った。部屋はちゃんとベッドが4つあって、結構広い部屋だった。

「俺こころ！！」

菜樹は真っ先に自分のベッドを決めて、言った。

「じゃあ、芽衣と小春はどこがいい？」

私は2人に尋ねた。

「そうね・・・じゃあ、あっちにするわ・・・。」

小春はそう言って、あっちのベッドに荷物を置いた。

「それじゃ！私は楓の隣だね！」

芽衣は明るく言って、荷物をおろした。私は残ったベッドに、荷物を降ろした。

もう一度、ホテルの前で集合した。

「お、今度は全員そろったな。」

伊吹もホッとしていた。なかなか班長もさまになっている。大貫先生が近くの学校の生徒たちを連れてきた。

「じゃあ、今から振り分けるから。そしたら、ちゃんと自己紹介す

るんだぞ！」

大貫先生は1人1人、向こうの生徒を班に振り分けている。

「——え〜っと、あ！あのツンツンが班長の班だ。」

「んあ！？“ツンツン”？」

伊吹は自分の髪を指して言った。私と空雅は笑いをこらえるのに精一杯だった。

「^{レイジ} 怜侍だ……。よろしく。」

私たちの班にきたのは、少し緊張気味の男の子だった。

「俺は、伊吹。こいつが空雅。その隣が楓と菜樹。そっちが隼と芽衣であいつが小春だ。」

伊吹が班員の紹介をした。

「俺、班長ね。」

と、付け足して。

「ツンツンの班長・・・か？」

怜侍が少し笑って言った。

「な、てめーだってツンツンだろーが！！／／／」

伊吹は怜侍の髪を指差して言った。

「こ、これのどこがツンツンだ！／＼／」

怜侍も自分の髪を指して、言い返した。本当にこの班（班長）は大丈夫なのだろうか・・・。

ドシッ

「いったゝ。よし、もう一回！」

ドサッ

「もお！何で？」

私はスキーに苦戦していた。もちろん私だけではないけれど。（伊吹が転んで、雪に向かって怒っている。）しかし、空にはスキーなどないはずなのに、なぜか空雅は上達が早かった。

「か、楓……。大丈夫？」

空雅はここまで滑ってきた。

「う、うん……。きゃっ！」

ドシンッ

私は立ち上がろうとして、バランスを崩したので、思いっきりしりもちをついてしまった。

「どうして私だけできないの……。。」

「いや、あいつもいるし……。。」

空雅は伊吹の方を横目で見て、言った。

「あんな奴と、一緒にされるなんて絶対嫌〜！」

私はそう言っ、雪の上に仰向きになって倒れた。

「重心が後ろにかかっているからではないだろうか……。。」

後ろから声がしたかと思うと、私はヒョイツと持ち上げられ、立ち上がることができた。怜侍だ。

「あ、ありがと……。。」

私はキョトンとしたまま言った。

「む・。。。」

怜侍はそう言っで、どこかへ行ってしまった。

「怜侍って何か、変わってるよね。」

私は怜侍が向かった方を見て、空雅に言った。

「変わってるね。」

空雅はニコツとして答えた。

やっと少し進めるようになったところで、今日はもう終わりだ。

「だー！。つかれたー！！」

伊吹はスキー板をはずしながら言った。何回も何回も練習したようだ。

「今日は頑張ったものね。。。」

小春が伊吹に話しかけた。

「!?!?・ああ。まあな。」

伊吹は少し驚いたが、ヘラヘラ笑って答えた。

「どれくらいできるようになった？」

空雅が伊吹に尋ねた。

「結構進めるようになったぜ？」

伊吹は自慢げに答えた。

「まだ少ししか進めなかったではないか。」

怜侍がさり気なく言った。

「んあ!?!?」

伊吹は怜侍が気に入らないようだ。この2人は一緒にすると危ない。

「まあ、まあ。それより早く夕飯のとこ行こうぜ!」

菜樹は2人をなだめると、そのまま食堂まで引っ張って行った。

「私たちも行こう？」

私はあとの3人と一緒に食堂に向かった。
同じ班で同じテーブルだ。

「明日はもっと遠くも行けるんだよね？」

芽衣が私に尋ねた。

「そうだね。なんか楽しみだな。」

私はワクワクして答えた。

「おい。食うか寝るかどっちかにしろ。」

伶侍が話している相手は菜樹だ。菜樹は食べ物に口を運んでいるものの、どうやら眠っているようだ。

「どうして寝ながら食べれるの・・・？」

芽衣は不思議そうに言うのだった。

今日はたくさん練習をしたので、みんな遊ぶことなくすぐに寝てしまった。それは、まだ4日もあるという余裕からでもあると思う。やっと滑れるようになった伊吹と私も、明日は遠くまで行けると分かったみんなも、明日は思いっきり楽しもうと思って眠りにつくのがあった。

今日はとてもいい天気だ。

「おっしゃー！滑るぞー！！！」

伊吹が気合を入れている。

「行くぞー！！！」

菜樹もつられて気合を入れた。私たちはリフトで上の方まで行くことにした。

「な、これに乗るの・・・？」

空雅は汗がダラダラ出ている。

「あゝ、よし！空雅は俺となー！！！」

伊吹は空雅を連れて、最後に乗り込んだ。

「うっわぁ。結構上まで行くんだね。」

私はまだ上手に乗れないので、怜侍と一緒に乗ったのだ。

「そうだな・・・。」

怜侍は私のはしゃぐ姿を見て、少し笑って答えた。

「怜侍はいつからスキーやってたの？」

「む・・・。物心付いたときからもうやっていたな。ここの人は皆そうぞ。」

「へ。じゃあ、すごく上手なんだね!!」

私はニコニコして言った。

「まあ、私はそうでもないが・・・。」

「・・・!？」

怜侍が“私”と言ったので、私は少し驚いた。

「どうしたのだ・・・？」

「怜侍って自分のこと“私”って言うの？」

「そうだが、おかしいか？」

怜侍はキョトンとしている。

「おかしくはないかもしれないけど、使ってる人あんまりいないし。」

「それもそうだな・・・。」

「ちょっとびっくりしただけ。」

私は笑って言った。

「これは父親の話し方が、うつってしまったからだ。」

「お父さんもそういう話し方なんだ。」

「私の父親は変わっているからな・・・。」

「（怜侍に言えるのか！？それ・・・。）」

私はそんな風に心の中でツッコミを入れながら、また周りの風景に視線を戻した。かなり上まで来たようだ。

「もうすぐ降りるぞ・・・。」

怜侍がぼそつと言った。

私が降りた後（上手く降りられなくて、かなり苦戦した。）伊吹と

空雅も降りてきた。

「空雅！顔が真っ青だよ！？」

私は降りてきた空雅を見て驚いた。

「へへへ……。」

空雅は笑っているつもりらしいが、顔はやっぱり真っ青だ。

「こいつ、こういうの駄目なんだよ。」

伊吹が空雅の後ろから言った。

「え？空では大丈夫なの？」

「ああ。下はそんなに見えないし、ずっとそこで育ってきたからじゃないか？」

「高すぎるから、大丈夫なんだと思うよ？」

空雅はぼそつと言った。

隼が先頭で、みんなでゆっくり滑って行くことにした。隼はスキーが上手いのだ。

「よし！ちゃんとついて来いよー！」

隼がみんなに（特に伊吹と私に）声をかけた。

「では、私が後ろからついて行こう……。」「

怜侍がぼそつと言ったのが聞こえた。

「おお、頼みまーす！」

「お願いしますよ？先生！」

伊吹と私は怜侍に言った。

「む・・／／／」

怜侍は照れくさそうにうつむいて言った。

「行つくぞー！」

隼の声が聞こえてきた。もう動いている。

「か、楓？」

「はい？」

空雅に声をかけられた。

「重心、重心！」

「あ！はいはい！！！」

空雅は私が転ばないか心配してくれているようだ。

「こら！う、動け！！前に・・・進め！！！」

伊吹が後ろでフラフラしている。私のせいで列がつまっていたようだ。

「ごめん、ごめん……。今行くから……。」

「楓！重心！！！」

「はいいい！！！」

私は反射的に返事をしてしまったが、後でよく見たらそれは怜侍だった。

「ええ！？な、何で？楓……？」

私は知らないうちに“楓”と呼ばれていることに驚いた。

「すまない……。どうやって呼べばよいか分からなくてな……／／」

怜侍は私の横で滑りながら言った。

「いいよ！楓で！！そうやって呼んで？」

「そうか。分かった。」

怜侍はニコツとして言った。

「むむ・・・／＼／」

「・・・空雅？」

私は驚いた。それは空雅が何か考え込んで、私と怜侍の会話を聞いていたからだ。

「お前も、頑張れ！」

伊吹がコソツと言った。

「・・・はい／＼／」

空雅は苦笑いで言った。

半分くらいまで、進んできた。（伊吹も私も何回も転んだ・・・）

「だいぶ、慣れてきたな。」

菜樹が伊吹に話しかけた。

「そーか？まあ、転ぶ回数は減ってきたけど・・・。」

伊吹は自分の足元を見ながら答えた。

「おーい！隼！こっから自由に滑ってもいいか？みんな、だいぶ慣れてきたみたいだしさあ。」

菜樹は前の方にいる隼に向かって言った。

「いいぞー！じゃあ、みんな下で待ってるよー！！」

隼がそう言っていると、芽衣と小春が仲良く滑って行った。

「上手くなったね！芽衣と小春。」

私は空雅に言った。

「か、楓だって結構上達したじゃん！」

空雅は笑顔で言った。

「ありがとう！じゃあ、行こっか！！」

私も笑顔で返した。

「待て、待て！！俺を置いてくなあ！！！」

伊吹は空雅のウエアーのすそをつかんで言った。

「はいはい・・・。」

空雅は苦笑いで答えた。

何とか無事に下まで来ることができた。

「私、何となく分かってきたかも!!」

私は転ばずに滑れるようになってきたのだ。

「伊吹も、結構できるようになったではないか・・・。」

「・・・そうかよ／＼／」

怜侍は伊吹をほめている。伊吹は頭をポリポリしている。

「そっか!」

私は珍しくて、嬉しくなった。

「じゃあ!もっかい、行きますか!」

隼のテンションも最高潮だ。

「今度はスイスイ行けそうだね。」

芽衣は私にぼそつと言った。

「へへへ……。まあね。」

私はそう言って、芽衣と一緒にリフトに乗り込んだ。私たちは上へ上っていった。

上に来た頃には、少し風が出てきていた。

「風、吹いてきたなあ……。」

菜樹が帽子を押さえながら、ぼそつとつぶやいた。

「風で滑りにくくなったりしないのかなあ。」

私は下の方を見ながら、菜樹に言った。

「しねーだろ。」

伊吹が口をはさんだ。

「何で？」

「……重いから。」

伊吹はニヤリとして言った。

「……!!」

私はキッと伊吹をにらみつけた。

「ころころ・・・。」

菜樹は私の頭をなでて、なだめてくれた。

「行かないのか？」

怜侍が不思議そうに私たちに尋ねた。

「行こっか！」

私はみんなに言った。

山の中、クネクネ道だ。

「曲がるのも楽しいね！」

芽衣が小春に話しかけている。

「あいつらいつからあんなに仲良くなったんだ？」

伊吹は2人を見ながら、顔をしかめて言った。

「良かったじゃん！」

と、私が伊吹に近づこうとしたその時、

「きゃっ!!」

私はバランスを崩して坂を滑り落ちた。

ザザザザザ

「楓!!」

ドシンッ

「・・・・・・・・・・。」

「く、空雅!？」

私が見ると、なんと空雅が。

「ごめん!!空雅、今退くから!!」

私は急いで退くと、空雅はヘラヘラ笑って言った。

「あはは、良かった。ケガしてなくて・・・。」

「空雅！空雅は？ケガしてない？」

私は空雅の板を外しながら、言った。

「うん。大丈夫だよ？」

「ホント・・・？」

空雅も大丈夫なようだ。

「おーい！大丈夫か？」

伊吹の声が聞こえる。

「うん！大丈夫みたい！！」

私は伊吹にそう返した。その後、起き上がろうとしている空雅に

「空雅、ありが・・・と・・・？」

私は空雅の動きがおかしいのに気がついた。

「・・・ツツ！！」

「空雅！？」

起き上がろうとした空雅は、途中で足を押さえて苦しんでいる。

「足？足痛いの・・・！？」

空雅はヘラヘラ笑っているが、顔は冷や汗でビショビショだ。

「早く下りようか・・・。」

私は空雅の板を持って、

「伊吹ー！行くよー！！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「え？何だこの音・・・。」

菜樹が伊吹と話している。

「上の方から聞こえてくるぞ・・・。」

伊吹が山の方を見て言った。

「おい！退くんだ！！そこから離れる！！」

怜侍の声が下の方から聞こえてきた。

あたり一面真っ白だ。私はあの後どうなったんだろう。

たしか、たくさんの雪の塊が・・そうだ。私は雪崩に巻き込まれたんだ。

「楓？ねえ、楓！」

芽衣の音がする。

「め、い・・？」

「楓！良かったあ。」

芽衣は私の手を握っていた。

「あ、あれ？雪は？」

たしか、雪に埋もれたはずなのに・・。

「ないよ。だって楓のすぐ後ろに雪崩が来てたんだもん。ギリギリセーフだったんだよ？」

芽衣は少し涙目だった。

「ごめんね。心配かけて・・・。」

私も少し涙目になって言った。

「良かった、誰もケガしてないみたいで・・・。」

芽衣がホツとしてつぶやいた。その言葉で私はハツとして尋ねた。

「ねえ！空雅は？空雅はもうみんなのところにいるよね？」

「え？いなかったよ？もう下の方にいたとばかり・・・。」

「空雅は私のすぐ後ろにいたんだよ！？」

「え！？」

芽衣も私も後ろを振り向いた。そこにはかなりの高さで、雪が積もっている。

「まさか・・・。」

私はそこにある雪を少しかき分けながらつぶやいた。

「うそ・・・。」

芽衣は少しパニックになっているようだ。

「芽衣！みんな呼んできて！！」

私は冷や汗でビッシヨリの芽衣の背中を押して言った。そして自分はひたすら、白い雪の中に手を入れて空雅を探した。しかし、どれだけ手を入れても、どれだけ声をかけても、空雅が出てくる気配はなかった。

「楓!!」

伊吹の声が聞こえてきた。

「大丈夫?楓!」

他のみんなの声もする。やっぱり空雅はあのなかにはいないみたいだ。

「俺も手伝うよ!」

隼がそう言っ、雪をかき分ける。

「私も!」

「私も手伝おう。」

雪をかき分ける手も増えていった。

「くそ!全然見つかんねえ...」

伊吹が真っ赤になった手を擦り合わせながら言った。

「ねえ。あれは何かしら...」

小春が指を刺して言った。

「下の方が光ってるよ？」

芽衣も指差して言った。その先には、弱弱しく光る青白い光が見える。

「あそこだ!!」

伊吹が下って行く。私たちも後に続いた。

「空雅!？」

私は空雅を見て驚いた。

だって、空雅がシリウスの姿に戻っているのだから。

第5章・スキー研修（後書き）

空雅の正体がみんなに見られた！？
次回お楽しみにw

第6章・大事件

みんなは目が点になっている。

「・・・犬？」

菜樹がしゃがみ込んで言った。

「どうしてこんなところに・・・？」

小春も首をかしげている。

「・・・あ。・・・ああ・・・。」

伊吹と私はワナワナしていた。

「どうするの・・・？」

私は伊吹を人気のないところへ連れて行った。

「どうするって・・・。ごまかすしかないだろ。」

伊吹はみんながいるところをチラチラ見ながら、小声で言った。

「ごまかすって・・・。そんな事できるの？」

「分かんねえけど、でも・・・やるしかないだろ。」

「やるって……。」

私がそう言っていると、伊吹は耳元で

「いいか、――。」

「……え!？」

「じゃあ、行くぞ!」

伊吹はそれだけ言って、みんなのところに戻って行った。

「あ!伊吹!!何してたんだよ。」

隼がほっぺを膨らまして言った。

「キモイって……。」

菜樹がぼそっとつぶやいた。

「ちょっとナミちゃん、聞こえてるんですけど……。」

「な、ナミちゃん!?!?てめー何勝手に!／＼／」

菜樹が隼の胸ぐらをつかんで怒鳴った。

「いいじゃん！可愛いし。ねえ、ナミちゃん！」

隼はケラケラ笑って、楽しんでいるようだった。

「……。」

伊吹が私に手招きをしている。私はこく、とうなずいた。いくか・・。

「みんな！空雅が見つかったって！！」

私は大きな明るい声でそう言いながら、走って行った。

「まじで！？どこ？どこにいたの？」

芽衣が私のところまでかけ寄って来た。

「さっきね、向こうの人が見つかったって！！あそこまで流されてみたい！！！」

私はニコニコつとして言った。

「良かったじゃん！じゃあ、帰ろうよ。」

隼がスキー板を持って言った。

「……この犬はどうするのだ？」

怜侍がシリウスを指差して、尋ねた。

「もちろん、連れて行くさ！」

伊吹は悩まず答えた。

隼と伊吹と怜侍でシリウスを、菜樹と小春と芽衣と私でみんなのスキー板などを持って、元の場所を目指して歩いていた。

「なあ、たしかここまできたら見たよな？リフト乗り場・・・」

菜樹が辺りを見回して言った。

「そうね・・・おかしいわ・・・」

小春も一緒に見回して言った。

「・・・む。」

「どうしたの？」

怜侍の声に、芽衣が不思議そうに尋ねた。

「・・・おそらく、さっきの雪崩で道がふさがったのだろう。」

怜侍は難しそうな顔をして言った。

「たしかに、周りの木も倒れてグチャグチャだ・・・」

伊吹が木を見て言った。

「道が変わっちゃったんだね・・・。」

芽衣がガツカリして言った。

「どうやって戻るの・・・？」

小春が上を向いて、みんなに尋ねた。

「高いところまで言ったら、下の方も見えるんじゃないか？」

隼が言った。

「リフトが見つかれば、それに沿って行けるのだが・・・。」

怜侍が言った。

「じゃあ、もう少し上まで行って、リフト探そ!!」

私は仕切って、前に進んだ。

雪の中をひたすら進んだ。しかし、リフトが見つかるどころかだんだん自分たちがどこにいるのかも分からなくなっていく。

「・・・だんだん風が強くなってきたな。」

怜侍が前髪を押さえて言った。

「うっ。雪も混ざってるみたい・・・。」

私も寒そうに言った。

「なあ、ここどこなんだ？」

伊吹が辺りを見回して尋ねた。

「結構高い所から雪崩れ落ちたみたいだね・・・。」

芽衣は山の上の方を見上げて言った。

「全然道が分かんねーや。」

菜樹が困ったように言った。

「今、何時なのかしら。だんだん薄暗くなってきたわ・・・。」

小春はかばんから、時計を出した。

「・・・6時20分。」

小春は自分でも驚いて言った。

「んあ！？な、な・・・何——！？」

伊吹がワナワナしている。

「集合時間、とつくに過ぎてんな……。5時半だろ？」

菜樹が伊吹のところまで来て言った。

「あゝあ……。くそ、大貫に言われたんだよ。“絶対班の奴ら全員、時間までに連れて来るんだぞ”って……。2つも先輩なんだから、それくらいできるだろ？”って！」

伊吹は悔しそうに、言った。

「仕方がないではないか……。私たちは“遭難”したのだから。」

怜侍がため息をついて言った。

「私たち遭難したのね……。」

小春もため息をついて言った。

「……。そっか、俺ら遭難したのか！」

隼も手をポンと叩いて言った。

「ずいぶん平気そうだね。隼は……。」

私は苦笑いで言った。

「だって、開き直るしかないだろ？」

隼はヘラヘラ笑って言った。私たちが初めて自分たちが遭難したと自覚した瞬間だ。

「もう、今日は無理だろう・・・。」

怜侍が言った。暗闇の中、ここを歩こうなんて思う人はいない。

「今日は寝られるところ、探そうか。」

私も続いて言った。

この頃には、シリウスも目を覚ましていた。

「良かった。こいつ重かったもんな。」

伊吹が嬉しそうに言った。

「大丈夫？足・・・。」

私はシリウスの後ろ足をさすって言った。

「うん・・・。」

シリウスは優しく笑ってうなずいた。

「おい・・・。お前ここではあんまりしゃべんなよ？俺たちだけの時はいいけどよ。」

伊吹は辺りを見回して静かに言った。

「ここでは、シリウスはただの犬になってるからね！」

私は苦笑いで言った。

「……。」

シリウスはこくん、と深くうなずいた。

「おい！2人とも、早くしろよ。」

隼の声が聞こえてきた。

「おう！今行く！！」

伊吹はそう言って、シリウスを連れて行った。

「目、覚ましたんだね！ワンちゃん。」

芽衣はシリウスの頭をなでながら言った。

「でかい犬だよな。」

隼はニコニコしながら言った。

「こいつの目も覚めたことだし、探すか？寝るとこ。」

伊吹もシリウスをなでて言った。

ワオーン

「・・・!?」

「今、何か聞こえたね。」

私は耳を澄まして言った。

「犬の声だよな。」

隼も言った。

「あ！シリウス!？」

伊吹が大声で言った。シリウスは声のする方に向かって、走って行った。

「足はつやゝ。」

菜樹がシリウスは向かった方を見て言った。

「ねえ、“シリウス”って何？あの犬の名前？」

芽衣が不思議そうに、伊吹に尋ねた。

「んあ!？・・・あゝ。」

伊吹は言い訳を考えている。

「（バカ……／＼／＼）」

私は顔に手を当てて思った。

「……お、俺がさっきつけたんだ。カッコイイだろう？」

伊吹はケラケラ笑って答えた。

「そうなの？ かつこいい名前。」

芽衣は納得したらしい。伊吹と私は目を合わせて、ホッとした。

「何をしにいったのだろう……？」

怜侍はシリウスが向かった方を見た。

「仲間が見つかったのかなー？」

芽衣はニコニコして言った。

「あ！ 戻ってきたよ！」

私が大声を出した。シリウスは私たちが見えるところまで来ると、小走りになった。

「何しにいったのさ。」

隼はシリウスの前でしゃがんで言った。

グッ

「え！？お、おい！」

いきなりシリウスは、隼のウエアーを引っ張った。

「どうしたの？シリウス！！」

私も驚いて、言った。しかし、シリウスはお構いなくグイグイ引っ張っている。

「シリウス・・・？」

今、シリウスが目で“ついて来て”と言っているような気がした。

「みんな！シリウスについて行こう？」

私はみんなに提案した。

「はあ！？何だよ？」

隼が引っ張っていたシリウスを振り払って言った。

「どこかに連れて行ってくれるかもしれないし。」

私はシリウスを見ながら言った。

「そんなの分かんねーだろ？」

菜樹が言った。

「でも、動いてみないと分からないじゃん！」

私はさっきよりも大きな声で言った。

「・・・むう・・・。」

「・・・？」

怜侍がうなった。みんなは怜侍に視線がいった。

「・・・まあ、ここでじっとしているよりはいいのではないか？」

怜侍は私の隣まで歩きながら言った。

「私も行くよ？」

芽衣が言った。

「私も、ここにいるよりは・・・。」

小春も言った。

「俺はシリウスを信じるからな。」

伊吹は当たり前とでも言うように言った。

「行きますかあゝ。」

菜樹も苦笑いで言った。

「待つて、待つて！俺も行くから！！」

隼も必死になって言った。

「じゃあ、行こう！」

私は笑顔でみんなに声をかけた。

シリウスは時々私たちの方を振り返りながら、先を歩いていた。

「菜樹？」

芽衣の声がした。

「ん？」

私も菜樹を見た。

「・・・んあゝ？」

菜樹は一応返事をした。

「歩きながら寝るんじゃないぞー？」

伊吹が前を向いたまま言った。

「・・・分かってるよ。」

菜樹はぶっきらぼうに言った。しかし、菜樹はコクコクしている感じだ。

「ここで寝たら死ぬぞ。」

伊吹が冗談で言った。

「まじかい・・・。」

菜樹はうつむいたまま言った。

「冗談だつて!!」

伊吹がケラケラして言った。

「いや・・・。」

怜侍の声が聞こえる。伊吹はキョトンとして言った。

「・・・へ？」

「冗談ではないかもしれないな・・・。」

怜侍はまじめな顔で言った。

「……………」

菜樹と伊吹は顔を見合わせている。

「は、早く行こーぜ……!!」

菜樹はすたすたと前の方まで歩いていった。

「……ホント？ 怜侍。」

私は少し怖くなって怜侍に尋ねた。

「……………少しは、いい眠気覚ましになっただろう？」

怜侍はニヤリとそう答えた。

ずいぶん歩いた気がする。もう日が沈んでどれくらい経っただろう。シリウスがピタッと止まった。

「……………」

私たちはシリウスの視線の先をよく見た。

「……………あ！どつくつだ！どつくつがあんぞー！」

隼がピョンピョン跳ねながら叫んだ。

「シリウスー！お手柄じゃん！！」

芽衣もシリウスの頭をクシャクシャして、喜んでいる。

「じゃあ、今日はあそこで休みますか！」

隼がテンション高々に言った。みんなは笑顔でうなずいた。

どうくつの中はあまり奥まで続いていなくて、すぐ行き止まりだったが、私たちはそれで良かったと思った。

「奥まで続いてたら、お前、怖くて泣き出すだろ？」

伊吹がホツとしている私に言った。

「私はそんな事で泣きませんー！！」

「どーだか・・・。」

伊吹と私がにらみ合っていると、

「仲がいいのだな・・・。」

怜侍がニコニコして言った。悪気はないようだ。

「はあああ！？」

2人そろって言った。

「お前、本気で言ってるのか？」

伊吹が怜侍の前まで来て怒鳴った。

「そうではないのか・・・？」

「なわけねーだろ！！／＼／」

「“ケンカするほど仲がいい”というのはお世辞だったのだろうか・・・。」

怜侍は真剣に悩んでいる。

「なあ、こいつ天然なのか？」

伊吹は私のところまで戻って来て言った。

「かもしれないね。」

私はクスクス笑って答えた。

「む・・・。」

「こ、今度は何だ！？」

伊吹は驚いて言った。

「つまり、この2人は仲が悪いというわけなのだな・・・？」

怜侍がスッキリした顔で言った。

「いや！そーいう事じゃねえ！！」

「じゃあ、どついう事なのだ？」

「・・・俺たちは、ただ仲が良くないだけだ！／＼／」

“同じことだろ！”とここにいる全員がつっこみたくなつたが、何とかこらえた。

「伊吹も怜侍に負けてないよ。」

私はニッコリしてつぶやいた。

「もう、俺寝るかな。」

菜樹がみんなに言った。

「そつするか。」

伊吹もあくびをしながら言った。

外もどつくつ内も寒いけれど、私たちの心の中はいつまでも温かか

った。

朝の冷たい風で目が覚めた気がした・・・。

か、楓？おい！

あ、空雅の声がする。まだ夢の中だ・・・。

おい！起きろー！！

ん？伊吹の声もするぞ？

「こら！起きんかい！！」

「うわ！？」

私は目の前にある、伊吹の顔に驚いた。

「ちょ、ちょっと・・・顔近・・・っ！？／／／」

さてよ？伊吹の隣でニコニコしているのは・・・誰？

「おい、伊吹。調子乗りすぎだよ・・・。」

・・・ニコニコしているのは・・・誰？

「いーじゃん、空雅！」

「・・・空雅！？」

いきなり叫んだ私に、2人だけではなくここにいる全員が驚いた。

「・・・何？」

「な、何でいるの？だって、シリウ・・・ス・・・。」

と、言いかけた私の口を、空雅と伊吹が一緒にふさいだ。

「ん〜ん〜！！（何ですよ！）」

「バカ・・・せっかくごまかしたのに・・・。」

伊吹が私の耳元でつぶやいた。

「シリウス？シリウスって、いなくなっちゃったんじゃないの？」

芽衣がキョトンとして言った。

「それにしても、空雅はすごいよね。一人でここまで探しに来れるなんて・・・。」

菜樹はニコニコして言った。

「へ、へへへ・・・。」

空雅は苦笑いをしている。

「って事だから！」

伊吹はそう言っ、私の口をふさいでいる手を離れた。

「そ、そうなんだ・・・。」

私も一緒に苦笑いして笑った。

さて帰ろうという時に、

「えー！？探しに来たのに来た道を覚えてないって！？」

隼が叫んだ。

「探すので必死だった……。」

空雅は申し訳なさそうにうつむいて言った。

「知らないで、当たり前なのにな……。」

伊吹が私にだけ聞こえる声で、つぶやいた。

どつくつの外に出ると、まだ風が吹いていた。

「うゝん、気持ちいい！！」ってわけにはいかないな。」

菜樹は少しガツカリして言った。

「何だか痛いわ……。」

小春は突っ立ったまま言った。風の中には細かい雪が混ざっている。それが顔に当たるのだ。

「雪なんて初めてだなあ……。」

空雅がぼそつとつぶやいた。

「え？初めてなの！？」

芽衣は驚いて大声で言った。

「え？あ！？えーっと、僕は雪がふらない南国に住んだの。」

空雅が笑いながら言った。

「（ウソつき）。」

私はそんな目で空雅を見た。

「（しょうがないだろう）。」

空雅はそんな目で私を見た。

「じゃあ？雪初めての空雅君は、楽しんでいてください！」

伊吹はニヤニヤして言った。

「では、そろそろ行こうか・・・。」

怜侍がみんなに声をかけた。

「行こ行こ！」

私は明るく言った。

雪崩のせいで道は変わっているので、昨日に引き続きリフトを探すことになった。みんなはほとんど何も食べていないので（隼が違反で持ってきたお菓子だけ）お腹はかなり減っているはずだ。それでも、全員が明るく振舞って紛らわしているようだった。

「あれ、リフトじゃない？」

芽衣が上を見上げて大声を出した。

「お！人が乗ってるぞ！！」

菜樹も見上げて行った。

「じゃあ、これに沿って下ろう！」

空雅は明るく言った。

私たちは今どれくらいの高さのところにいるのかが分からないので、これからどれだけ歩けばいいのかも分からなかった。

「あゝ。行き止まりだ！」

隼が残念そうに言った。雪崩でここまで来た雪の塊で、ここから先の道はふさがれているのだ。

「仕方がない、違う道で行くでしょう・・・。」

怜侍がため息をついて言った。

「だー！何だよ・・・。」

伊吹がいきなり座り込んだ。

「ちよつと、行くよ〜?」

私は伊吹の腕を引つ張りながら言った。

「くそ〜・腹減ったああ!!!!」

ドカツ

伊吹はそう叫んで、雪の壁を蹴飛ばした。

バラバラバラバラ

「・・・へ?」

伊吹はポカンとしている。

「・・・。。」

私は伊吹の手をつかんだまま、動けなくなつた。伊吹が蹴飛ばしたところにひびが入り、そこからバラバラと崩れていったからだ。

「あ——————!!!!」

隼が驚いて叫んだ。

「……………」

怜侍はプルプル震えている。

「うそ!？」

芽衣は口に手を当てて言った。

「まじかい……………」

菜樹はボーっとしている。

「は、ははは……………」

空雅は苦笑いをしている。

「あ……………」

小春も驚いて言った。

崩れた雪の壁の向こうには、私たちの滑っていたスキー場が見えていた。

向こうから大貫先生が走ってくる。

「おーい！！お前らああ！！」

何だか少し涙声だ。

「せんせーい！！！」

「お前たち……。」

全員の目がウルツときていた。しかし、

「どこ行つどつたんじゃー！ー！ー！」

先生はそう怒鳴ると、私たち全員の頭を殴った。

バコツバコツボコツ

「（鬼・・・！！）」

全員がそう思った。

「俺たちがどれだけ心配したと思ってるんだ！！」

「・・・ごめんなさい。」

「・・・まあ、お前たちも疲れただろ？今日はゆっくりしてりゃいいさ。」

先生はすぐに笑顔になって言った。

「（珍しく優しいな・・・。）」

全員がそう思った。

私たちは、とりあえず食堂に来た。

「もお・・・！心配したんだから！！」

「どこ行つてたんだよう！」

「大丈夫？ケガとかしてない？」

みんなが声をかけてくれる。こんなに心配してくれてたなんて・・・。

「はあゝ！やーっと飯にありつける・・・。」

伊吹がガッツポーズをして言った。

「よくがまんしたね。」

私は伊吹の肩をポンポンして言った。

「・・・あれ？」

芽衣がかばんをゴソゴソしていた。

「どうしたの？」

空雅が尋ねた。

「・・・ない・・・。」

「何が・・・？」

「ないの・・・手袋が・・・。」

芽衣はかばんの中身をすべて出した。

「ポケットは？」

空雅が言ったので、芽衣はポケットを裏返した。

「どうしよう・・・。どこかに落としちゃった・・・!!」

芽衣は深刻な顔で言った。

「なぐに泣きそうな面してんだよ！たかが手袋の1つや2つ・・・。」

「

伊吹が椅子に座りながら言った。

ボカッ

「・・・ってーなあー!!」

菜樹が伊吹の頭を思いつきり殴った。

「何なんだよ・・・。」

「お前、いくらなんでも言っていないことと悪いことがあんだろ!!」

菜樹も怒っているようだ。

「どうしよう・・・お兄ちゃんからもらった、大切な手袋なのに・・・」

芽衣はパニックになっている。

——「その日はな、芽衣の誕生日で・・・兄貴は芽衣の誕生日プレゼントを買いに行っていた

たらしい。手には、ピンクの手袋を握りしめて・・・。」

「・・・あ。」

私は思い出した。そして、

「芽衣！それって、昨日はあったんだよね？」

「うん・・・あった・・・。」

「じゃあ、あのどつくつからここまでの間で落としたかもしれない。」

「おい！どこ行くだ！」

伊吹が、走り出した私を引き止めた。

「何言ってるの！？探しに行くのよー！」

そうやって、私はそのまま走り去って行った。

「くそお．．．俺の昼飯．．．」

伊吹がそう言いながら、私の後に続いた。怜侍も続く。

「もうひと頑張りだぞ・・。」

そして、伊吹の肩をポンポン叩いた。

「い、嫌……。お兄ちゃん……。ど、どうしょ……。」

「おい！芽衣！？」

菜樹が芽衣の肩を揺らした。

「嫌・・。嫌あああああ・・。」

「芽衣！芽衣——！！」

バタツ

「芽衣——！！！！！！」

私は元来た道に戻ることにした。

「大丈夫、1回歩いた道だもん・・・。」

待っててね、芽衣・・・。

「おーい!!」

「・・・ん?」

その声は、あつという間に近づき、

ポカッ

「いったあゝ!」

「てめー、何勝手に1人で動いてんだよ!!」

伊吹が怒鳴った。

「だつて・・・。」

「・・・1人では大変であろう・・・。」

怜侍も耳元でささやいた。

「ありがとう。2人とも・・・。」

私は嬉しくなって言った。

「楓——！！」

菜樹の声だ。空雅もいる。

「菜樹！？どうしたの？」

「芽衣が倒れた……。」

菜樹は深刻な顔で言った。

「え！？」

「かなりショックだったらしい。多分また兄貴のことを思い出したんだろうぜ……。」

「私、ちょっと見てくる！」

と、私が引き返そうとした。その時、

「行くな——！！」

菜樹にグイッと引き戻された。

「大丈夫。芽衣には小春もついてる。」

菜樹は建物の方を見たまま言った。

「それに、今はその大事な手袋を探す方が先だと思うけど？」

空雅が優しく言った。

「そうだね、ごめん。」

私がそう言つと、菜樹もホツとしたように手を離した。

「ん〜。ないなあ・・・。」

私は伊吹が壊した雪の壁を抜け、どうくつの辺りまでやって来た。

私は雪を退かしながら、ぼそっとつぶやいた。

「赤いから、目立つはずなのにね・・・。」

空雅も横で言った。

「あつたか？」

伊吹もこちらにやって来た。

「うっん。どこにもないの・・・この辺にあると思ったのになあ。」

私は首をかしげて言った。

「なあ、空雅。オオカミとかが持ってたらしなのか？」

伊吹は一緒に悩んでいる空雅に尋ねた。

「あゝ。聞いてみないと分かんないけど・・・。」

と、言つと辺りを見回した。

「・・・聞いてみる？」

ニヤリとそう言つと、急に強い風が吹いた。

ピオオオオオオオ

私は帽子を押さえて言った。

「ねえ、この風つて、2人が変身する時に必ず吹くよね・・・？」

「そうなんだよなあ・・・俺も最近気づいた。」

伊吹も髪を押さえながら言った。

「あ、シリウス。」

そんな事を言っている内に空雅はシリウスになっていた。

「じゃあ、ちょっとオオカミを探してくる。」

シリウスは言った。

「ここで呼びゃあいじゃん。」

伊吹はキョトンとしている。

「2人が危ないって……。」

シリウスはそう言って、あっという間に走り去ってしまった。

「確かにな……。」

伊吹はシリウスは走って行った方を見たまま、苦笑いで言った。

伊吹と私はまた、手を動かし始めた。

「なあ、芽衣の手袋ってそんなに大事なのか？」

伊吹が手を動かしたまま、私に尋ねた。

「……うん。お兄ちゃんの形見なんだって。芽衣の誕生日に買ってくれたみたいだけど、その帰りに交通事故で……。」

私は手を止めて言った。

「・・・あー！ー！！！！手え止めんな！！動かせ、動かせ！！」

「あ、ごめん・・・。」

伊吹はそれ以上のことは聞かなかった。

「・・・伊吹って結構優しいよね。」

「んあ！？」

私の急な発言で、伊吹は戸惑っているようだ。

「な、何言って・・・／／／」

「（照れてるし・・・。）」

私はクスクス笑った。

「何笑ってるんだよー！！／／／」

伊吹は顔を真っ赤にして言った。

「だってさあ〜。」

ザザッ

「しゅ。」

「うわああ!？」

「だああ!？」

シリウスの突然の声に、伊吹と私は一緒に驚いた。

「いきなり現れんな!足速すぎなんだよ!」

伊吹は少し怒って言った。

「何してるんですか?お2人さん!」

シリウスは少し膨れて言った。

「べ、別に?何もしてねえし・・・」

「そお?とっても仲がよろしいんですね。」

「(仲いいなあ。)」

私は1人でそんな事を考えて、ニコニコしていた。

「こら、笑うな!!」

2人は同時に言った。

そんな話がしばらく続いた後、

「ってか、お前何か手がかり見つけたんだろ？」

伊吹が思い出したように言った。

「あ、そうだった・・・。」

空雅はスツカリ忘れていたようだ。

「ねえ。何、何？」

私はワクワクして尋ねた。

「・・・多分、鳥が持ってたみたいだよ？」

シリウスはサラッと答えた。

「そっかあゝ。って！鳥！？」

私は身を乗り出して言った。

「鳥・・・。」

シリウスは考えている。

「どうすんだよ！どうやって探すつもりだこらあー！！」

伊吹は少し怒鳴ったように言った。

「・・・ああ！―どうしよう！」

シリウスもやつと事の重大さに気づいたらしい。

「どうする？鳥だよ？シリウス、何か他に手がかり聞いてないの？」

「え？他って・・・？」

「ほら、その鳥の特徴とか！」

「・・・あ、真っ黒だつて！」

シリウスは思い出して言った。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「え！？何々？」

シリウスは黙り込んだ伊吹と私を順番に見て言った。

「それって・・・カラスじゃん！！」

私が大声で言った。

「だよなあ、俺もそう思った。」

伊吹も苦笑いで言った。

「あゝでも、ここにはそんなにカラスはいないと思うから、結構絞れたね！」

私は明るく言った。

「でもさあ・・・そのカラスを見つけないと意味ないよね。」

シリウスが言った。

「そうそう。カラスが手袋付けてるわけじゃあるまいし・・・。」

伊吹はそう言つと、雪の上で大の字に倒れこんだ。

「そうそう・・・。」

私もそう言つて、伊吹の横に倒れこんだ。

「・・・あああああああ！！！！」

「うわ！！！」

「え！？」

伊吹の叫び声にシリウスと私は飛び上がった。

「何よゝ、いきなり・・・。」

「い、いるぞ・・・？カラス、手袋付けて・・・。」

伊吹は上を指差しながら言った。

「何言つて……。そんなのいるわけないじゃん……………」

私はそう言つて、上を見上げた。

「…………あああああああ！！！！」

「……………」

シリウスはキョトンとしている。

「シリウス、見て……………」

「上に……………」

「…………あああああああ！！！！」

シリウスも目を大きくして驚いた。本当にいたのだ。手袋を付けているカラスが……………」

「まあ、正確には持っているようだが……………」

「うわあああああああ！！！！」

3人は一緒に声を上げた。後ろから聞こえた声は、怜侍だった。

「おや？空雅は……………」

怜侍は辺りを見回して言った。

ビオオオオオオオ

また強い風が吹いたかと思うと、少し離れたところから空雅が走ってきた。

「あははは。風でさ、帽子が飛んでっちゃった・・・／＼／」

空雅は苦笑いをして言った。

「（危な～・・・。）」

空雅は内心そう思った。

「で、あの鳥はどうするつもりだ？このまま飛ばせておくのはどうかと思うが・・・。」

怜侍はだんだん小さくなっている鳥を見て言った。

「やつべ！忘れてた！！」

伊吹がそう言うのと、私たちは鳥の近くまで走って行った。

「どうやって落とす・・・？」

私はあとの3人に尋ねた。

「ふっふっふ……。ここは、この伊吹様に任せなさい！」

伊吹はニヤリと言うと、雪で石ころのような玉を作った。

「当てるの？あんなに上の方にいるのに……。」

「大丈夫、俺は狩りできたえてるから。」

伊吹は自慢げに言った。

「狩り……？」

怜侍が首をかしげている。

「あああ！いや、俺さ。野球やってたから、こんなのチヨロイチヨロイ！」

ギリギリでごまかせて、伊吹と空雅と私はホッとした。

伊吹はさっき作った雪球を手に持つと、鳥に狙いを定め始めた。

「よし……。。」

と、舌をペロツと出した。

「行け！！！」

勢いよく飛んでいった雪球は、

ボカッ！

そのまま飛んでいるカラスに命中した。

「やったあ！！」

空雅と伊吹は思わず飛び跳ねた。

カラスは、そのまま落ちて来て、怜侍がギリギリでキャッチした。

「き、貴様ら！落とすなら落とすで、受け止める準備をしておけ！！／／／」

怜侍が怒鳴った。

「あ、悪い悪い……。忘れてた／／／ありがとな。」

伊吹が頭をかきながら言った。

「む……。まあいいだろう……。」

怜侍はそう言って、カラスを雪の上にゆっくり下ろした。

「ホントにくわえてたんだね。」

空雅はカラスの口から手袋を取った。

「こいつ、探したんだぞ！」

伊吹はカラスをツンツン突いた。

「あははは・・・。」

それを見て、私が笑っていたその時、

バタバタバタバタバタ――

「うわー!!」

伊吹は驚いて、しりもちをついてしまった。

「び、びっくりしたあ・・・。」

私が言った。

「でも・・・あのカラスの方が、もっとびっくりしてるだろうね。きつと。」

空雅が笑いながら言った。

「さー手袋も見つけたことだし、帰ろっかー!!」

私も笑顔で言った。

「芽衣も喜ぶだろうな……。」

伊吹がぼそつと言った。

しかし、その笑顔も長くは続かなかった――。

「ただいまー!!」

私たちは、ホテルまで走って帰ってきた。もう辺りは暗くなってきたからだ。

「おかえり……。芽衣が目を覚ましたわよ。」

小春もニコニコしている。

「芽衣〜!!」

私は大きな声で言った。

「楓〜!!」

芽衣はそう言っつて、外まで出てきた。

「芽衣! 見つけたよ! 手袋!!」

私は笑顔で言った。しかし、

「・・・。」

突然、芽衣の笑顔が消えた。

「どうしたの? 芽衣・・・。」

私は芽衣の顔をのぞきこんだ。

「・・・いない・・・。」

「・・・え?」

「そんなの・・・いない!!」

芽衣は大声で言った。

「おい、お前何言ってるんだよ！なくしたって騒いでたのはお前だろ！？」

伊吹が言った。

「だつて・・・。」

私の誕生日にお兄ちゃんはいなくなった。

――芽衣！誕生日おめでとー！！

――これ、プレゼントだよー！！

――うん・・・ありがとう・・・。

誕生日に何でも欲しい物をくれるって言っけど、それは絶対無理だ。

――私が欲しいのはお兄ちゃんだけだもん・・・。

芽衣は少しの間黙っていた。

「何でいらなの・・・？」

私は優しく尋ねた。

「こんな物あつたって意味ない・・・。」

「何でだよ！今まで大事にしてきたんじゃないのか！？」

伊吹は怒り出した。

「だって、そんな物が帰って来たって、お兄ちゃんは帰って来ないじゃない！！！」

芽衣が目には涙を浮かべて叫んだ。

「・・・・・・。」

私は何も言えなくなってしまった。どうやら今回の原因で、芽衣はお兄さんの事を思い出してしまったようだ。空には星が小さく光っている。

「もう、夜だな・・・。」

菜樹がぼそつと言った。しばらくの間沈黙が続いた。

「・・・死んだ奴の気持ち、考えたことあつか・・・？」

伊吹が静かに言った。

「・・・え？」

芽衣は伊吹の方を見た。

「ここに残された奴だけじゃなくて、いつちまった奴の気持ち、考えた事あるか!？」

伊吹の声が大きくなった。

「・・・。。。」

「いつちまった奴が、お前みたいな奴を見て、どう思う？」

「・・・。。。」

「大切な奴が苦しんでる時、自分がそこまで行って声かけてあげてえのに、それができない気持ちがお前に分かるか!！」

伊吹は少し涙を浮かべているようだ。

「伊吹は、自分と重ねてるんだ・・・。」

空雅が私にだけ聞こえる声で言った。

「そつか・・・伊吹って芽衣とは逆の立場なんだね・・・」

私も空雅にだけ聞こえる声で答えた。

「・・・お兄ちゃん・・・ごめんなさい・・・」

芽衣は弱弱しく言った。そして、

「・・・お兄ちゃんに会いたいよ・・・」

芽衣はしゃがみ込んだ。

「芽衣・・・」

私も一緒にしゃがみ込んだ。

「ばつかじゃねー？あそこにいんじゃない！お前の兄貴！！」

いきなり伊吹が空を指差して言った。

「伊吹・・・」

菜樹は首をかしげて言った。

「あ！でも、あっちかもしれない。いや、こっちかも・・・」

伊吹は空のあちこちを指差している。

「僕はあれだと思っけど・・・」

空雅も空を指差して言った。

「んあ！？ちげーよ！あれは牡牛座だろ？」

伊吹は空雅に怒鳴った。

「あは・・・あはははは・・・。」

「んあ！？」

芽衣が笑っている。伊吹は驚いていた。

「お兄ちゃんどこだろう・・・これから探さなくちゃね・・・。」

芽衣は空を見上げて、少し笑いながら言った。

「私も一緒に探してあげる！」

私も笑顔で言った。芽衣の笑顔が戻ったのが嬉しいのだ。

「よ、良かったわ・・・。」

小春はそう言つて、芽衣に抱きついた。

「小春が笑ってる！！」

菜樹が言った。

「初めて見たな～！」

空雅も言った。

グウウウ~~~~~

「え!？」

私は突然の音に驚いた。

「悪い・・・腹鳴った・・・・・・・・／／／」

伊吹がお腹を押さえながら言った。

「昨日の夜から、何も食べてないはずだからな・・・・・・・・。」

怜侍は伊吹の肩を叩いて言った。

「そりゃ大変・・・。」

空雅が苦笑いで言った。

「うおおおお!!腹減ったぞおおおお!!!!」

伊吹は空に向かって、大声で叫んだ。

「あははははは・・・・・・・・。」

私たちはやっと、全員で笑うことができたのだった。

それからの2日間。私たちは思いっきりスキーを楽しむことができ、とうとう帰る時が来た。

「もう、会えないのだな・・・。」

怜侍が寂しそうに言った。

「会えるよ?。」

私は笑顔で言った。

「そうだよ、また会えるって!。」

空雅も笑顔で言った。

「そうだぞ?今度はこっちにも呼んでやるし・・・//」

伊吹はボソボソっと言った。

「でわ、約束だぞ！」

怜侍は笑顔で言った。

「お前らゝ置いてくぞゝゝ！！！」

大貫先生の声がする。

「3人とも、もう行かなきゃ！」

芽衣が呼びにきてくれた。

「置いてくわよ・・・。」

小春もやって来た。

「じゃあな！怜侍！！！」

菜樹は怜侍に言った。

私たちは、バスに乗り込んだ。そして窓から顔を出すと、

「元気でね〜！」

私が言った。

「忘れるなよ！」

伊吹が言った。

「また会おうね!!」

空雅が言った。

「む・・・。」

怜侍は笑顔でうなずいた。

こうして私たちは、5日間のスキー研修を終えた。

そして、お世話になったスキー場に別れを告げ、自分たちの住むところへ帰って行った。

第6章・大事件（後書き）

ありがとうございます！

第7章・探してきたモノ

スキー研修を終え、私は自分の家に帰って来た。

「ただいま。」

疲れきった体を早く休めようと、すぐに自分の部屋へ行って、ベッドに横になった。

「疲れたあ。」

私はそう言って天井を見た。

「あ！そういえば……。」

家族にお土産を買って来たことを思い出した。

私は階段を駆け下り、リビングへ行った。

「お母さん！お父さん！お土産……！」

夕飯の後片付けをしている母と、のんびりテレビを見ている父に声をかけた。

「ありがとう、楓。」

「ありがとな。」

2人はニコニコして受け取ってくれた。

「琴音は・・・？」

「部屋にいるんじゃないかしら。もう、寝てると思うから、起こしちゃだめよ。」

母が言った。

「分かったあー！」

私はそう言いながらも、階段を上がると、琴音の部屋の前まで来ていた。

「琴音？」

「・・・あ！楓？」

琴音の返事が返ってきた。

「（何だ、起きてるじゃん・・・。）」

私はそんな事を考えながら、ドアを開けた。

「琴音、お土産ちゃんと買ってきて来たよ？」

私はニヤニヤして言った。

「わあゝありがと！楓！！」

琴音は嬉しそうだ。

「研修どうだった？」

私は研修で起きた出来事を一通り、琴音に話してあげた。

「たくさん思い出できたみたいだね！」

「うん。楽しかったよ！」

「私も早く行きたいなあゝ。」

琴音はそう言うのと、時計を見て行つた。

「そろそろ寝た方がいいんじゃない？明日早いでしょ？」

「いいのいいの、私は大丈夫だし。」

私は首を振って言った。

「いつつも起きられないのに？」

琴音は嫌味っぽく言った。

「起きてるしゝ。」

「あれは私が起こしてるんでしょ？」

「まあ？確かに？」

「あはは、どうして楓は変なところで素直になるのかなあ・・・？」

「何でだろうね・・・。あはは——。」

そんな風に2人で笑っていると、

ザワザワザワ——

いきなり強い風が吹いた。カーテンがなびいてバタバタいつている。私は琴音の机の上から落ちた紙を元に戻し、窓を少し閉めた。そして、琴音に目を戻した。

「・・・琴音！？」

私は琴音の姿を見て驚いた。

「・・・・・・・・。。。」

「え？どうなったの？何でそんな姿なの！？」

「・・・・・・・・。。。」

—— “ 俺たち星座は夜になると、元の姿に戻っちまうんだよ!! ”

—— “ 10時になったら、みんなこうなっちまうんだ・・。 ”

—— “ ロキは子犬座だから、子犬に戻るんだよ。 ”

「・・・! ?」

私は思い出した。

—— “ 子犬に戻るんだよ。 ”

「 どうして! ? なんで琴音が! ? 」

私の前には、小さな白い子犬が座り込んでいた。

どうして？どうして琴音なんだろう・・・。

「楓！」

シリウスが窓から入ってきた。

「・・・空雅？」

私は、ヘタツと座り込んでしまった。

「・・・待ってて！伊吹オリオンも呼んでくるから！！」

シリウスはスツと窓から消えた。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

私と子犬は1回も顔を合わせなかった。

少しの間待っていると、シリウスがオリオンを引っ張ってきた。結局私はずっと、“どうして琴音なんだろう。”とだけ、考えていたんだと思う。

「おい！楓！！しっかりしろよ！！」

オリオンは私の顔の前で言った。

「・・・うん。大丈夫・・・。」

私は小さな声で返事をした。

「そっか・・・。楓の妹が口キだったんだ・・・。」

シリウスはそう言うと、ロキの近くまで行った。

「うそだ・・・。今まで、ずっと一緒にいたのに！琴音のわけない！！」

私はいきなり大きな声を出して言った。

「言っただろ？俺たちは人間の記憶を操ることができるって。」

「でも、琴音は……。」

「楓！」

ロキは初めてしゃべった。

「……ごめんね。今まで黙ってた。」

「……やっぱり？やっぱり琴音がロキなの！？」

ロキは黙って、うん、とうなずいた。そして話し始めた

「私ね、空に着た理由が――。」

――よしよし……。いい子だな。

この男の人は、ロキは飼い主だ。

――ワン！

そして、ロキはこの飼い主が大好きだった。恵まれた環境と、
大好きな飼い主。ロキはとても幸せは日々を過ごしていた。

そんなある日。

—— お前に、上手い酒の作り方を教えてあげよう・・・。

酒の神様が、飼い主の日ごろの行いを見て気に入ったのか、酒の作り方を教えてくれたのだ。

—— よし。これで、村のみんなを喜ばしてあげよう。

飼い主はそう思い、村に帰ってすぐに酒を作り始めた。

—— 頑張ってるなあ・・・。

ロキはそんな目で飼い主を見ていたのだった。飼い主は酒が出来ると、さっそく村のみんなに酒を飲ませてあげようと足を運んだ。

—— さあ、飲んでください。

飼い主の声を聞いて、みんなが集まって来た。

—— おお！これは上手い！

—— こんなもの、飲んだことないぞ！

酒は大好評。みんなはどんどん飲んだ。

しかし、酒をのんだわけなので、だんだんみんなは酔ってきてしまった。

— な、何なんだ！？フラフラするぞ！

— クラクラだ……。

— お、お前、何をした！！

酒を初めて飲んだ村のみんなは、飼い主が酒に毒を入れたのだと勘違いしてしまったのだ。

— 許さないぞ！

— 何をしてくれる！！

— 殺してしまえー！！！！

そう言うど、みんなで飼い主を殴りにかかった。

— 止めてください！誤解です！！

飼い主の声も聞かず、

— ワンワンワン！！

もちろん、ロキの声も届かなかった。

飼い主はそのまま、死んでしまった。

— お父さん！！

走って駆けつけた、飼い主の娘は、自分の父の姿を見てショックを受けた。

—— どうしてこうなるのよ……!!

そして、飼い主の娘もそのショックで死んでしまったのだ。

—— クーン……。

自分の家族をすべて失い、1人ぼっちになってしまったロキを、

—— 我ら神が犯したことじゃ……。

そう言って、神様は可愛そうな犬のロキを空に打ち上げたのであった。

「—— っていう事……。私、嫌だったの。みんなからかわいそう”って目で見られるのが。でも、飼い主の人も殺されてしまっ、家族も死んでしまっ……ホントはかわいそうなのかもしれない。だからって、自分はかわいそうになんたくなかったよ？ 私はみんなと一緒に、みんなと同じ立場でいたかった。でも——」

おばちゃん！遊びにきたよー！

あら！みんないらっしやい！！さあ、上がって！

ロキは友達と一緒に近所の、おばさんの家に遊びに来た。

外は暑かったでしょ？

うん！すごく暑かった。

友達はそう言って、アイスを口に入れた。

美味しいね！

ロキもそう言ってアイスを口に入れた。それから、楽しい時間をおくした。

帰る時間になると、友達とロキはおばさんにありがとうと言ひ、玄関まで来た。

ばいばい！また来るね！！

友達は手を振りながら言った。

ばいばい！！

ロキも手を振りながら言った。そのまま帰ろうとした私を、おばさんが引き止めた。

―― ロキちゃん。これあげるわ……。頑張つてね！

おばさんはロキの手に飴をのせた。

―― あ、ありがとう！

ロキは嬉しくて、走って友達のところまで戻った。

―― 何だよ！

―― ……え？

―― お前、またもらってきたんだろ？お前だけずるいぞ！

―― そんな…。あげるよ？

ロキは友達の手には飴をのせようとした、しかし友達はそれを払いのけて、

―― お前はいいよな！そうやってもらえて！！みんなロキ、ロキ
つて――！！

―― ……でも……。

―― もつ、お前なんかと遊んでやんない！！！！

友達はそのまま、ロキの前から消えた。飴は寂しそうに地面で転がっている。

「なんで……。私、何にもしてないのに……。どうして？どうしていつもこうなるの？私はどうしてかわいそうな子って言われるの？」

ロキは地面の飴を足でつぶした。

「もう、嫌だ……。！！ここには私の居場所なんてない！！」

「だから私は、ここまで来たの。誰も、信じられなくなつたの！」

ロキの頭を私はなでた。

「琴音が自分の住んでいた空から、来たこともない地球にやってくる
ときの気持ちは、きっと私では想像できないくらい心細かっただろう。
そんな気持ちでここにやってきた琴音に、私はなんてことを言
つてしまったんだろう。」

「う、ごめんね……………」

私は自分のことしか考えていなかったんだと分かった。

「琴音の気持ちも考えないで……………」

私はロキの頭から手を離れた。

「私、琴音ばかり大切にしてもらえて、ずっと我慢してたの…。で、琴音のせつかくの誕生日に1人で怒って……。ホントにごめん……。」

それを聞いた口キは、私の声をかき消すくらい的大声で

「楓が謝ることない!!」

「琴音……。」

私は消えそうな声で言った。

「楓だつて、たくさん傷ついてたじゃんか！私なんか、お母さんとお父さんに優しくされるのが嬉しくて、楓のことを傷つけていたことに気づかなかったんだ……。悪いのは私だよ！」

「そんな……。琴音のせいなんかじゃないよ……。」

「楓たちが探しているのも気づかないで、私だけその間も笑ってたなんて……。」

口キはうつむいている。

「琴音は傷ついて、ここに来たんでしょう？だったらいいじゃん。勝手に来たのはいけないけれど、でも……自分の力じゃどうにもならなかったんじゃないの？」

私は優しく言った。

「……うん。」

ロキは小さくうなずいた。

「琴音はここでいっぱい笑ってた。だったらもう大丈夫！私は琴音は出来る子だって知ってるんだから！」

私は明るく言った。

「だから、もう戻りなよ。みんなが心配してるよ？」

と、付け足した。

「・・・でも、私がいても・・・。」

と、ボソツとつぶやいた。

「お前なあ・・・。」

オリオンが呆れて言った。

「ロキ・・・。僕たちは3人そろわないと意味がないんだよ？」

シリウスはロキの前に座って言った。

「・・・え？」

「忘れたのか？俺たちは“冬の大三角”じゃねーか！」

「そう。神様が僕たち3人を選んだんだ・・・。」

と、オリオンとシリウスはロキに言った。

「じゃあ、3人じゃないと駄目なんだね！」

私が言った。

「他の人じゃ駄目なんだ・・・。」

【冬の大三角】

シリウスは静かに言った。

オリオン座のベ

テルギウスと子犬座の

「代わりはいねーんだ！」

プロキオン、そ

して大犬座のシリウスで

オリオンは少し大きな声で言った。

出来ている正三

角形。真ん中を淡い冬の

「・・・探したんだよ？」

銀河が流れる。

シリウスが優しく言った。

「そうだよ！心配させやがって！！」

オリオンは少し怒ったように言った。

「・・・ごめんなさい。」

そう言って、ロキの目からは涙が流れた。

ロキはゆっくり話し始めた。

「誰かが探しに来てるのは何となく分かった……。でも、それがシリウスとオリオンだとは思わなかったよ。」

「どうして？」

シリウスはキョトンとして尋ねた。

「だって、シリウスはまだここに来るのは早いし……。」

ロキはうつむいて言った。

「何言ってるの！ロキのが年下じゃん！」

シリウスは笑顔で言った。

「あと、オリオンが来てくれるとも思わなかった。」

「何でだよ！」

オリオンは驚いて言った。

「そんな感じの人じゃなかったし……。」

「んあ！？勘違いすんな！俺はこいつが心配だから来たただけだ！／／」

オリオンはシリウスの頭をクシャクシャしながら言った。

「でも、3人が探してくれてたなんて、何だか嬉しいな。」

ロキはニコニコして言った。

「こら、こら……。喜ぶな……。」

私はロキの頭をクシャクシャして言った。

「あー!!」

そして私は思い出した。

「じゃあ、ロキは、私たち家族の記憶を操ったの?」

「ううん?」

ロキはサラッと言った。

「え!?!でも、私には昔から琴音の記憶があるんだけど?」

私は驚いて言った。

「そりゃ、楓の記憶だけ、操ったんだもん……。」

ロキは静かに言い、そして少しためらってから、

「……じゃあ、お母さんたちに聞いてみる?」

と言った。

下に下りて、リビングに入ると、2人は目を大きくして驚いた。そりゃ、2匹の犬と大きな男が一緒なのだから。しかし、2人はすぐに状況を飲み込んで言った。

「そう……。探しているのは楓だったの……。」

「え？お母さん、知ってたの！？」

私は驚いて言った。

「知ってたぞ？」

父も当然のように言った。

「ええええええ！？」

シリウスとオリオンと私は驚きで口が開いたままだ。

「だって俺たちが拾ったんだもん。なっ！母さん。」

「そうよ？この子、子犬の姿で倒れてたんだもの」。

ある雨の日。

——あら！子犬だわ・・・！

母は道の端っこで気を失っている、小さな子犬を見つけた。

——とりあえず、家まで連れて行こうかしら・・・。

そう思った母は、その子犬を家まで連れて帰って来たのだっ
た。

家にいた父は、母が連れて来た子犬を見て、

——うわ！びしょぬれじゃないか・・・！ちよつとタオル持って来
る！

父はすぐにタオルを持って来て、子犬を吹き始めた。

——どうしたんだ？この子犬・・・。

——さつき道の端で倒れてたのよ。こんな梅雨の時期に、捨て
るなんて・・・。飼い主の顔　　が見てみたいわ！

母は少し怒って言った。

—— さ！乾いたぞ？

父がタオルを退かした瞬間、

—— ビオオオオオオオ

強い風が吹いた。

—— ……何なんだ？この風。

—— ちょっと、窓閉めて来る。

と、母が立ち上がった。すると、風はやんでしまった。

—— あら、やんだわ……。

—— うわ！？

父は大声を上げた。

—— きゃあ！

母も驚いて一歩下がった。

そこには小さな女の子が座っていたのだ。

——ど、どうしたの？この女の子……。

母は恐る恐る、父に尋ねた。

——知らないよ！さっき犬がいた場所に、この女の子がいたんだ。

——どうして……？

2人がいつまでも悩んでいると、

——あの……。

女の子が声を出した。

——え！？ああ……。

母はいちいち驚いている。

——あ、ありがとうございます……。拾ってください……。。

女の子は深々と頭を下げた。

——いいわよー！でも、ちょっと説明してくれない？私、今訳分
かんなくなつて……。

母の言葉を聞いて、女の子は自分の正体や、ここへ来た理由を話し始めた。

……そうだったの……。ロキって言うのね？

話を聞き終えた母は、少し考えて言った。

じゃあ、家にいなさい？

優しく言った。

でも、楓は？どうする？

父は心配そうに言った。

私は、人間の記憶を操ることができます。力は弱いけど、人くらいなら、できるかも　　しれない……。　　1

ロキは2人を見て言った。

じゃあ、誰かが探しに来るまで……。よろしくね！

母は明るく言った。

2人目の娘だな！

父も笑顔で言った。

—— はい！お世話になります！！

ロキは嬉しそうに言った。

「——— それで、琴音って名前を付けて、天川家の娘として今まで一緒に暮らしてきたのよ？」

母が話し終わると、私は笑いながら言った。

「あゝそれで、琴音ばかり手がいつてたんだね・・・。」

私は笑っているつもりなのに、何だか涙が出てきた。

「楓・・・！？。」

母は少し驚いていた。

「なゝんだあ・・・。私、一人で怒っちゃって、バツカみたい！」

「・・・。。。」

みんなは黙り込んでいる。

「言ってくれば良かったのに・・・。私だけ仲間はずれかあ・・・。。。」

「楓！すまん！！」

いきなり父が頭を下げた。

「お前には変な心配かけたくなかったただけなんだ・・・！すまん！！」

「お、お父さん・・・。」

「ごめんね楓！！私たち武器用で・・・。1人にしか十分に手をかけてあげられなくて、本当にごめんなさい！！」

母も頭を下げて言った。

「違うの楓！お母さんもお父さんも、楓のことはいつも心配してたの！ホントだよ？」

ロキは私の足に手をかけて、言った。

「・・・。」

私は黙って聞いていた。

「楓！ごめんなさい！！」

3人は一緒に謝った。

「・・・いいよ！」

私は大きな声で言った。

「・・・え？」

ロキは顔を上げて言った。

「もう、謝らなくてもいいよー!」

「楓・・・。」

母も顔を上げて言った。

「・・・私だって、本当は構って欲しかったただだよ・・・!」

私がそう言つと、今まで頭を下げていた父が私たち3人を抱きしめた。

「・・・いいな。家族って・・・。」

オリオンはシリウスにぼそつと言った。

「そうだね。家族はいいね・・・。」

シリウスもニツコリして言った。

「頑張ってたんだね。今まで気づかなくてごめんね。」

母は私の頭をなでながら言った。

「そつだよ、おばちゃん。こいつ頑張ってたんだぜ。」

オリオンが言った。

「そういうとこ、僕たち認めてるんですよ？」

シリウスも言った。

2人は恥ずかしそうに笑いながら私を見た。

私は涙でくしゃくしゃの顔を上げて、もう一度袖でぬぐうと、みんなに思いつきりの笑顔を見せた。

「へへ・・・。そんなにほめないでよ・・・。///」

私も恥ずかしそうに2人を見た。

私たちは、また仲のよい家族に戻った。

「楓。いい男が2人も周りにいてくれて、いいわね。」

母がからかって言った。

「何言ってるの？どこがいい男なのよ！」

私はシリウスとオリオンを見て言った。

「おい！その言い方は気に入わねえぞ！」

オリオンは少し怒って、言った。

「確かに〜。」

シリウスもムスツとして言った。

「冗談だつて・・・。」

私は苦笑いで言った。

「さあさああ！！そろそろ寝る時間だぞ〜？」

父は私たちの背中を押して言った。

「はい！」

私たちはそう言って、階段を上がり、部屋に入って行った。

「良かったあ。家族が戻つて〜。」

私はベッドに寝そべると、改めて言った。

「ホント。ロキが見つかって良かった〜。」

シリウスも床に寝そべって言った。

「じゃあ、これで全部終わったな！」

オリオンが言った。

「・・・そうだ・・・ね。」

私が言った。

「・・・あ。」

シリウスも言った。

「・・・んあ!？」

オリオンも言った。そして、2人で同時に、

「僕たち・・・。」

「俺たち・・・。」

「もう戻らなくちゃいけないんだ・・・。」

外ではいつの間にか、雪が降り始めていた。

第7章・探してきたモノ（後書き）

とうとう次で最後になってしまいました。
ホントにここまでありがとうございます！
最後までよろしくお願いしますw

最終章・冬の終わり

私が朝目が覚めると、外は一面雪で真っ白だった。そして、今日学校へ行ったら、明日から冬休みなのだ。

「ほら！空雅も伊吹も！遅れるよ？」

私は靴をはきながら、2人に言った。

「今行く！！」

空雅はそう言って走ってきた。

「あゝ待て！ちょっと待て！！」

伊吹は声だけ聞こえる。

「もゝ．．．。遅刻しちゃうよ。」

そう。私たちは昨日から一緒に暮らすことになった。元々空雅は私の家の屋根で寝泊りしていたし、伊吹も家を借りることがなくていいと思ったからだ。

「伊吹ゝ、もう行くからなゝ！！」

空雅はそう言って玄関を出た。

「待て待てゝゝゝ！！」

伊吹は叫んでいる。

「いいの？」

私は空雅に尋ねた。

「いいんだよ！あいつこうしないと、こりないんだから！」

「そつか・・・。」

私は苦笑いした。

「あ！菜樹～～！！！」

私は踏み切りを渡ったところで、向こうから来る菜樹に手を振った。

「楓～～！！！」

「おはよー！！！」

私は明るく言った。

「何？何だか元気じゃん！」

菜樹は私を見て、言った。

「まあね～。」

私がそう言った、その時。

「待てって……言っただろー！ー！ー！！！！！！」

伊吹が全力疾走で走って来た。

「ああ、伊吹……。」

私はサラッと言った。

「こらこらこら……。せつかく人が一生懸命走って来たっていうのに……サラッと流すな！！」

伊吹は怒鳴っているつもりなのだろうが、疲れているせいか、あまり迫力がない。

「やっと来たの？遅いぞ伊吹！」

空雅が挑発した。

「んあ！？てめーがおいてったんじゃねーか！！」

「伊吹が遅いんだよ！」

「ちょっと待ってるぐらい、いいじゃねーか！！」

「うるさいなあ……。」

「心の狭い奴め！！」

2人のケンカはいつまでも続きそうだ。

「2人とも!!!!!!」

私は大声で怒鳴った。

「朝からケンカしないの!!」

「・・・はい。」

空雅が言った。

「おゝ怖え・・・。」

伊吹も言った。

「まったく、仲がいいのか悪いのか・・・。」

私はため息をついて言った。

「あははは・・・。」

その隣で菜樹が笑っていた。

そして、学校に着いた。

「冬休みか。楽しみだなあ。」

空雅は外の雪景色を見ながら、言った。

「だね。」

私もそんな空雅を見てニコニコして言った。

「ちゃんと、勉強もするんだぞ。」

大貫先生が言った。

「わ、分かってますって！！／／／」

私は驚いて言った。

「（絶対分かってない・・・！！）」

先生と空雅は同時に思った。

終業式が終わり、学年で集会があった。そこで、空雅と伊吹が冬休みが終わったら転校していくと伝えられた。しかし私には、本当は2人が空に帰って行くと分かっていた。集会の後、

「なあ！聞いてねーよー！！」

隼が信じられないという顔をして言った。

「そうだよ！！何で言ってくれなかったの！？」

芽衣が大きな声で言った。

「水臭いぞ〜〜！！」

菜樹も言った。

「・・・ごめん！急に決まったことだったから・・・。」

空雅はそう言っただけで何度も謝った。

「・・・じゃあ！冬休みの最後にみんなで別れ会な！！」

隼は2人に言った。

「いいね！私賛成！！」

芽衣は飛び跳ねて言った。

「私もやりたいわ・・・。」

小春も言った。

「じゃあ、私の家でやる？」

私は明るくみんなに言った。

その帰り、

「あゝお別れ会って、何するんだろう・・・？」

空雅がニコニコして言った。

「楽しみだな。」

伊吹もニコニコしている。

「怜侍も呼ぼう？」

私が提案した。

「いいね！そうしよう！！」

空雅はさらに喜んで言った。

「げっ！まじで・・・！？」

伊吹は後ずさりして言った。

「いいじゃん！結構２人、仲良かったし。」

私が言った。

「いやいやいや！それは外見だけだって！絶対！！」

伊吹は首を振って言った。

「そうかなあ・・・」

空雅は首をかしげて言った。

「ま、いいじゃん！多い方が楽しいしさ！」

私がそう言って、丸く収まった。

それから冬休みに入り、私たちは一緒に出かけたり、年を越したりした。

冬休みが終わったら、2人は空に戻ってしまう。それは家族全員が分かっていた。しかし、誰1人として、それを話題に出す人はいなかった。

それから、冬休みもとうとう最後になってしまった。

「ちょっと、伊吹、邪魔邪魔!!」

母はそう言って、家の中を走り回っている。今日はお別れ会なので、家の人は朝からバタバタしているのだ。

「お別れ会ってこんなに忙しいものなの!？」

空雅は驚いているようだ。

「いや、家の母さんがバタバタしているだけだと思っぞ?」

父は落ち着いて言った。

そうこうしている内に、みんながやって来た。

「おじゃましてーす!!」

「はいはい。」

私はそう言って玄関まで走って行った。

「飲み物買ってきたよ!」

芽衣が買い物袋に入ったペットボトルを上にした。

「ありがとう!!」

「入っていい？」

隼が言った。

「いいよ？あれ・・・？怜侍見なかった？」

「え！？怜侍も来るの？」

菜樹が驚いて言った。

「つてことは、見てないのかぁ・・・。」

私はちょっと心配になったので、近くまで探しに出かけた。

「あ!」

私が見つけた時には、怜侍は私の手作り地図を持って、ずいぶん頭を悩ませているようだった。

「あ！良かった・・・。もうたどり着けないかと思ったぞ・・・。」

「ごめん、怜侍を悩ませているのは、その地図だね・・・？」

「まあな・・・。」

怜侍は苦笑いをして答えた。

「やっぱり、私はこういうの苦手だから・・・。」

「そんな感じだな・・・。」

「・・・どういう意味よ／＼／」

私が言った。

「ここにも雪が降るのだな・・・。」

怜侍が辺りを見回しながら言った。

「うん。そうだよ？怜侍が住んでる所ほどは降らないけど・・・。」

怜侍と私はそんなことを話ながら、家までたどり着いた。

「みんな～！怜侍が来たよ～！！」

「おお～！！怜侍～！！」

一番早く来たのは空雅だった。

「空雅、久しぶりだな！」

「うん！元気だった？」

空雅は本当に嬉しそうだ。

「もちろんだ。」

怜侍もニコニコしている。

「・・・お前、ホントに来たのかよ。」

伊吹が後ろから言った。

「せっかく私が、遠い雪山からはるばるここまで来てやったというのに・・・。」

怜侍は眉毛の辺りをピクピクさせて言った。

「まあ、まあ・・・。」

私は2人をなだめて、リビングに連れて行った。

その後はみんなで母の手料理を食べたり、思い出話をしたりして

楽しい時を過ごした。

「そういえば、2人はいつここを出るの？」

芽衣が尋ねた。空雅と伊吹はお互いに顔を見合わせ、

「明日にはもういないと思うよ？」

と空雅が言った。

「じゃあ、今日で本当に最後なんだな・・・。」

隼が悲しそうに言った。

「バーカまた会えるに決まってるんだろ！」

伊吹は隼の頭をコツツと叩いて言った。

こうして楽しい時間はあっという間に終わっていった。

「じゃあ。私たちそろそろ帰るわ。」

小春が言った。

「そうだな。もう遅いし・・・。」

菜樹も言った。

「お前ら元気でいろよ!!」

隼が2人の肩をパンパン叩いて言った。

「転校しても頑張ってね!!」

芽衣が力を込めて言った。

「どんなことにも負けんなよ!」

菜樹が2人の胸に手を当てて言った。

「私、応援してるから……。」

小春が笑顔で言った。

「何かがあつたら、私を呼ぶのだぞ!」

怜侍が強く言った。

「うん!」

「おう!」

空雅と伊吹は笑顔で返事をした。

みんなが帰った後、

「さあ！あとは家族水入らずで！！」

私が明るく言った。

「家族・・・？」

伊吹が言った。

「うん！だってみんな家族でしょ？」

「ありがとう・・・。」

空雅と伊吹が照れくさそうに言った。すると、空雅が何やらポケットをゴソゴソし始めた。

「どうしたの？」

琴音が不思議そうにポケットをのぞき込んだ。

「いや……。最初に楓に会った時にさ、これ落としてったんだよ。」

空雅は犬のぬいぐるみを取り出した。

「何それ……？」

そう言いながら、琴音は首をかしげた。

「うわ！何だよそれ」。どう見ても、犬じゃねえし。それに、ボロボロだし……。」

と、伊吹は笑いながら言った。

「ごめん……。ボロボロなのは、僕の管理が悪かった……。」

空雅は下を向いて言った。

「……………」

私は考えながら、ぬいぐるみを見ている。

「……そっか。私、琴音にあげようと思って作ってたんだ。」

「そうなの！？楓！」

琴音はぬいぐるみを眺めながら驚いたように言った。

「まあ、自信作ではないけどね・・・。」

私は小さな声でぼそつと言った。始めの頃は自信作のつもりだったが、改めて見るとそこまで言えるようなものじゃないと気づいた。

「だよな。だって、糸がいろんな所から出てるし。お前、不器用だな。」

伊吹は大笑いで言った。

「もお！そこまで言わなくてもいいじゃん！！／／／」

私はムキになって言った。

「不器用！不器用！！」

伊吹はそう言っ、私の髪をクシャクシャした。

「ちよつと・・・。」

私は困って、空雅の所へ行こうとすると

「そっいえば、何でずっと持ってたんだよ。こんなボロボロなやつ。」

伊吹は笑いを辞めて、空雅に尋ねた。

「ん・・・。なんとなくだよ・・・／／／」

「なんとなくで持つてるか？普通。」

「だ、だから……。ポケットに入ってること、忘れてたんだよ……」

空雅は困っているようだ。

「ふん……。」

伊吹はニヤニヤしている。

「な、何だよ！その顔！！／／／」

空雅が大声になって言った。

「お。空雅がムキになった……。」

伊吹は遊んでいるようだ。

「知ってたか？お前、嘘ついてるときなあ。目が泳ぐんだぜ？」

「なんで、そんな話になるんだよ！！／／／」

「さっき泳いでたぞ。」

楽しそうな家の中。私と琴音は静かな庭まで来ていた。

「ありがとう・・・。」

「え？」

私は、初めて聞いた琴音のありがとうに驚いた。

「今まで、ごめんね。辛い思いさせて・・・。」

「なんだ〜。いって！そんなこと。私、気にしてないし。」

私は明るく笑った。琴音は泣いているのに、何だか笑顔だった。

「どこに行っても、私のお姉ちゃんは楓だけだからね。」

「うん。」

私は初めて、妹がいて良かったと思った。

「私、ホントの妹じゃなかったのに。楓は優しくしてくれて、嬉しかったよ。」

「神様は何してるのかは分からないけどさ・・・私の記憶の中には、琴音との思い出で一杯なんだよ？だから、琴音は私のホントの妹だよ！」

私が笑顔で言うと、

「楓らしいな・・・。」

と、後ろから声がした。

「え!？」

そのとき、強い風が吹いた。

ビオオオオオオオオ

私は思わず目をつむってしまった。

風がおさまり、目を開けると――。

目の前には、ロキとオリオンが立っていた。

「あゝ。もう10時か・・・。」

オリオンが言った。

「そうだね・・・。」

私が言った。そして、

「シリウスは？おいてきたの？」

と、尋ねた。

「だって、アイツ目が泳いで・・・。」

「・・・？」

私はオリオンが何を言っているのか分からなかった。

「おい！」

「あ！シリウス！」

シリウスはオリオンの足に自分のしっぽをぺシッと叩き付けた。

「おいてくなよ！」

「知らねーよ！そんなこと！」

今度はオリオンがシリウスの頭をピンツと弾いた。

「いって！」

「・・・・あはは。」

私は2人のケンカを見ていて、つい笑ってしまった。

「・・・・どうした？」

「何？楓？」

「ごめんね・・・でも、もう見れないんだね。2人のケンカも・・・」

「・・・・楓、あのさ・・・。」

「うわああああああ！！」

「・・・・！！？」

オリオンがいきなり叫んだ。

「お、お前・・・。シリウス！言えてんじゃん！！」

「へ！？」

シリウスは何のことだか分かっていない。

「何のこと？」

私は興奮しているオリオンに尋ねた。

「お前、気づかないのか？こいつ、“楓”ってちゃんと言ってるぞ

「！」

オリオンは少し嬉しそうに言った。

「あ！言えてた！！」

シリウスは自分で驚いていた。

「今気づいたのかよ・・・。」

「良かったね！シリウス！！」

ロキも言った。そして、

「昔から、全然直らなかったのにね！」

とも言った。

「昔から・・・？」

私は不思議に思って尋ねた。

「うん！年下の私には言えるけど、シリウスが同じ年の女の子を呼び捨てで呼ぶなんて、初めてだよ？」

「そうなんだあゝ。」

「あと・・・。」

ロキはニコニコしている。

「あと、何？」

私は気になって尋ねた。

「オリオンがこんなに女の子と仲良くしてるなんて初めてなんだよ。」

ロキはニヤニヤして言った。

「お、おい！余計なこと言っくな！！／／／」

オリオンはロキの頭を押さえて言った。

「へえ～～～～。」

私はキョトンとして言った。

「・・・だから、楓はすごいんだよ？私たち、楓のおかげで変わったんだ！」

ロキはそう言つと、

「ありがとね！楓！！」

と、最後に言った。

「ホントにありがと！」

シリウスも言った。

「・・・まあ、感謝してるよ・・・。」

オリオンも言った。

だんだん風が吹いて来た。

「もうそろそろ、行かなくちゃ！」

シリウスが空を見上げて言った。

「そーだな！」

オリオンが言った。

「3人とも、もうケンカしないでよ？」

私は3人に言った。

「分かったよ！しない！！！」

オリオンが言った。

「・・・僕たちは“冬の大三角”。いつでも一緒にいるよ。」

シリウスは笑顔で言った。

「知ってた？楓。」

ロキが突然ニコニコして言った。

「え？何が・・・？」

私は何のことだか全く分からなかった。

「私たち、みんな楓を選んでたんだよ？」

ロキはシリウスとオリオンの腕につかまって言った。

「どういうこと・・・？」

「だから、僕は最初に楓を探してて。隣の席にまでなった。」

シリウスがニコリして言った。

「で、俺もお前に秘密を全部話した。」

オリオンも照れくさそうに言った。

「そして、私は楓の家に来た！」

ロキは私の腕も一緒につかんだ。

「みんな楓を選んだんだ。」

3人は一緒になって言った。

「・・・ありがとう。」

私はすごくすごく嬉しくなった。

「だから、これからもずっと・・・ね！」

シリウスが私の手をとった。

「じゃあ私、毎晩“冬の大三角”探す！！」

私は力を込めて言った。

「お前に探せるのかあ？」

オリオンはケラケラ笑いながら言った。

「探せるもん！」

私はそう言って少し笑った。

「頑張れ、楓！！」

ロキが言った。

「うん！！」

私は元気に返事をした。

そして、最後は笑顔で、

「楓！元気でね！！」

「じゃあな！楓！！」

「またね！楓！！」

「みんな、ありがとう！！」

4人は決して“さよなら”とは言わなかった。

それは、いつもどこかで見てくれていると信じているから。

また笑顔で会えると信じているから――。

雪が解け始めている。

3人が立っていたところからは、小さな小さな芽が出ていた。

もうすぐ春が訪れる――。

気持ちいい風が、窓から入り込んでいる。その風で、私は自分から目を覚ました。

「よし!!」

今日から、高校生になるのだ。私は新しい制服を着ると、鏡の前に立った。

「天川楓! 今日から高校生です!!」

そんな独り言を言いながら。

「お! 制服似合ってたんじゃないか」。

私がリビングに入ると、父がこちらを向いて言った。

「へへ／＼／＼」

私は少し照れくさくて、頭をかいた。

「楓、早くしないと遅れちゃうわよ!」

母は明るくそう言って、私にパンを差し出した。

「あ!やばい、やばい・・・。」

私はパンを受け取って、椅子に座った。

持ち物OK、かばんも持った・・・心の準備もできている。

「楓、友達作るのよ!」

玄関まで来た私に母が笑顔で言った。

「最初っからドジるなよ!楓!」

父も笑顔で言った。

「うん!」

私も笑顔で言った。

「いってらっしゃい!—!」

母と父が、私の背中を手で軽く押した。私はすぐに後ろを振り返った。

「いってきます!—!」

外は天気がよくて、少し桜が舞っている。私は本当に、高校でうまくやっていけるのだろうか?
いや、心配することはない——。

私は空を見上げた。

——いってきます。

きれいな青空の中で、星が小さく光った気がした
|。
|。

E
N
D

最終章・冬の終わり（後書き）

ここまで読んでくださって、ホントにホントにありがとうございました！

私も楽しくできましたw

また、違う作品も書いていきたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0712c/>

星空を見上げて

2010年12月30日02時53分発行